
El loto florece eternamente.

狛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

El loto florece eternamente .

【Nコード】

N7741X

【作者名】

狛

【あらすじ】

藍染との戦いも終わり、一護は霊力を失い死神代行としての任務を終えた。その一年後。霊力が高まり始めた夏梨は亡き母、真咲の夢を見る。そしてその日、突如現れた大虚に襲われた。 注意書き
必読！更新遅めになると思います（汗）

A t t e n t i o n !

注意書きです。

これはBLEACHの二次小説です。故に作者の多大な解釈と妄想が織り込まれています。

時期的には藍染との戦いが終着した後、一護が靈力を失ってから一年くらいです。

夏梨ちゃんと遊子ちゃんは小六です。

そしてここからが一番重要！

作者は、BLEACHの漫画は死神代行喪失篇からしか持ってません

全巻読んだことには読みましたが、アニメすら見てないので細かい設定などは曖昧だったりします。

なので、「このキャラはこんなこと言わない！」などありましたらお知らせください。

あと、文字化けする漢字は他のに置き換えるつもりなのでよろしく願います。

では次から本編です。

Threat, and Desire・(前書き)

脅迫、そして切望。

Threat , and Desire .

雨の中、泣いていた。

橙色の鮮やかな髪は、曇天の空に良く映える。

地面に広がる紅は、色を失くした世界に酷く映える。

『母ちゃん』

泣いていた。

己を責めた。

決意した。

誰も死なせない、絶対に護ると。

力を手に入れた。

護るものが増えた。

焦った。

自分には、その全てを護るだけの力がないと。

欲した。

もっと、もっと。

みんなを護る力が欲しいと。

彼は応えた。

我が意は主にあると。

だがそれは太陽を追い詰める。

護るものがあればあるほど、それは太陽を追い詰め、苦しめ、縛り殺す。

脅迫。

そして、

彼は護る力の全てを失った。

それはいきなりの出来事だった。

雨が降っていた。

一番近く感じていたものが、ぱったりと感じられなくなった。

いなくなった。

同じ日に生まれた片割れは酷く泣き、

【一つを護る】と名付けられた兄は酷く己を責めた。

漆黒の髪を持つその少女は深く悲しみ、無力な自分に腹を立てた。

泣かなくなった。

少しでも強くあろうと決意した。

無力は歯痒い。

力が欲しい。

今まで護ってくれた兄を、

母の代わりを務めた姉を、

護りたい。

力が欲しい。

黒曜石の瞳は前を見つめる。

雲の合間から、光から、声が聞こえた。

The destiny is out of gear .

「んちゃん、夏梨ちゃん！」

酷く寝覚めの悪い朝だった。

覚醒する意識の中で色素の薄い髪が目の前で揺れる。

「夏梨ちゃん、寝過ぎしちゃうよ！」

ゆさゆさと揺さぶる双子の姉をぼんやりと見つめる。

姉　遊子は心配そうな声を漏らす。

「具合が悪いの？」

「……んーん、眠かっただけ。一兄は？」

「もう起きてる。早く下りてきてね？　下で待ってるから」

ぱたぱたとスリッパの音が遠ざかる。

漆黒の髪を持つ少女は目を擦りながら怠い身体を起こす。

「……変な夢」

そして頬を叩き一喝すると、着替えて部屋を出た。

「夏梨ちゅわあああん!!」

リビングの扉を開けて目に飛び込んでくる髭面の男。

夏梨と呼ばれるその少女はさりと避けると、そのまま男の後頭部に踵を打ち付ける。

まさに慣性の法則で廊下に飛び出した男をそのままに、中に入り扉を閉めた。

「ちよつと!?!? 夏梨ちゃん!!?!」

廊下から聞こえてくる叫びを余所に、何時もの席に座る。

「一兄おはよ」

「おはよう。珍しいな、夏梨が俺より遅いつて」

「ちょっと寝心地が悪かったただけだよ。最近、霊が無駄に寄ってくるしね」

淡々と白米を口に運びながら、真横にいた男の霊に肘鉄を食らわせる。

橙色の髪を持つ兄には、夏梨がただ腕を動かしたようにしか見えな
い。

「夏梨ちゃんも大変だね」

遊子は鬱すらと霊を見ることが出来るが、ただそれだけ。

夏梨は霊が見える、聞こえる、触れる。幼い頃から霊感が強かった。

橙の髪を持つ兄、一護にもかつては霊感があつたのだ。夏梨と同等、
またはそれ以上の霊感により“異形”なるものさえ寄ってくる事も
あつた。

“異形”なるもの、ホロウ虚と呼ばれるそれは魂を喰らう。

いわば悪霊。

そして彼は“死神”だった。

漆黒の袴を身に纏い、刀を奮い虚を滅する者。

だがそれは過去の話。今の彼には霊に触れるどころか見ることもさえ叶わない。

「ねえねえ！ 無視しないでよ！ お父さん寂しくて泣いちゃうよ！？」

先程夏梨によって蹴り出された男もまた死神だ。その事実を知るのは一護のみ。

「うるさいよヒゲ」

「母さああん！！ 最近夏梨が冷たいよおお！！」

これは全て日課。変わることのない日常。

だが、この時既に歯車は狂い始めていた。

異常な音を奏で、確実に。

南頂した太陽が照り付ける。

時刻はちょうど十二時。

窓から射す日光を浴びながら、夏梨は顔を青ざめ机に突っ伏していた。

(……気持ち悪い)

頭痛と吐き気。授業終了の鐘が鳴るまで残り二十分。

拳を握り、何とか堪えていたのだが、やむなく手を挙げた。

「先生、具合が悪いので保健室行ってもいいですか」

普段は真面目で、しょっちゅう男子に混じってサッカーをしていた夏梨には珍しい事だ。

担任の女教師は驚き、すぐに行くよう促す。

教室を出る際に、心配そうな顔をした遊子と目が合った。

「うー……だる……」

初めて入った保健室のベットに横たわる。

ものの数秒、夏梨の意識は闇に沈んだ。

『夏梨……』

「ッ!」

はっとして目が覚める。ドクドクと心臓が早鐘を打ち、全身が汗で濡れていた。

（またお母さんの夢……）

懐かしい、嬉しいはずなのに。

この言い知れぬ不安は何だ？

『夏梨、呼んで?』

優しく微笑む姿は幼い頃の記憶と同じ笑顔。

時計に目を遣れば、長針はちょうど三を指していた。

十五分しか寝ていない。それなのにとっても長く寝ていたような。

オオオオオオオオオオオオ

突然のしかかる重圧。夏梨の脳裏に白色の化け物の姿が浮かぶ。

一護には言っていなかった。彼が死神としての能力を失った時から、夏梨は幾度か虚に襲われている。

無力な子供が死なずに済んだのは、怪しい駄菓子屋の店主のお陰だ。縁のある帽子を目深に被り、甚平に羽織りという格好の店主は一護に戦いを教えた張本人であり、彼もまた死神だ。

オオオオオオオオオオオオ!!

悍ましい声に身を震わせる。

その化け物の狙いが自分であることに気付いていた。

夏梨は保健室を飛び出し、教室へ荷物を取りに戻る。

「夏梨ちゃん!？」

「ごめん遊子！ 具合悪いから帰る」

止められる前にランドセルを背負い学校を飛び出す。

ランドセルの中には対虚用の電磁捕縛丸が入っている。言わずもがな、駄菓子屋『浦原商店』店主の浦原喜助から貰ったもの。

『虚に襲われたら店^{うち}に来てください』

そう言われて渡されてからまだ日は浅い。

言われたように浦原商店へ走るが、突如目前に現れた虚に足を止めた。

今まで見たどの虚とも違っていた。

姿形も、大きさも、感じる重圧も。

町すら飲み込んでしまいそうなほど巨大で、鼻の尖った奇妙な面は静かに夏梨を見下ろす。

恐怖。

「な、んだよ、これ……」

足が竦む。感じたこともない恐怖に歯が力チ力チと鳴る。

動けなくなった夏梨をよそに、その虚は歯を剥き出した獐猛な口を大きく開き襲い掛かった。

歯は夏梨の身体に食い込み、尋常でない痛みに夏梨は絶叫する。

メノスゲランデ
大虚と呼ばれる虚は夏梨に歯を立てたまま天を仰ぎ、そこから来たのだろう、空間の裂け目に吸い込まれるようにして消えた。

そこには血だらけになった子供が倒れているだけだった。

カラン。

下駄の音と共に突然現れた男。

浦原は夏梨を見て、その周辺を見回す。

眉に皺を寄せた。

(……おかしい)

夏梨を抱き上げ、口許に耳を当てる。微かながらに聞こえる呼吸の音。

「これはまた……荒れそうですね……」

そう一言残し、次の瞬間には消えていた。

Where is her soul now?

四限目の途中だった。

「先生、保健室に行ってきます」

「先生！ あたしも！」

「……」

滅却師である石田に井上、チャドが廊下を駆けていく。

また虚か、と他人事のように思う自分が心底嫌になる。

だが、少しして井上から掛かってきた電話に、俺は血の気が引いた。

「……何だって……？」

「夏梨ちゃんが、虚に襲われたって……」

頭の中が真っ白になる。

夏梨が、何で……。

「夏梨は無事なのか!？」

「分からない……とにかく浦原商店に来てもらえるかな」

電話越しで井上の声が震えていた。無傷ではないことが嫌でも分かっ
てしまう。

電話を切ると、すぐに浦原商店へ向かった。

「お久しぶりっス、黒崎サン」

一年前に、最後に見た時と変わらない姿。

「夏梨は……!？」

「彼女なら今横になってますよ」

中に入ろうとして、浦原さんに制止される。

いつもの飄々とした笑みはそこになかった。射るような目に見られ、
危うく出かかった言葉を飲み下す。

「最初に言っておきますが、妹サンは死んではいません」

そんな言葉はいらない。“死んではいない”。その言葉の裏にある
事実は何なのか。

「ですが生きているとも言えません」

無情に響く。

「どづいうことだよ……！」

「彼女の魂魄がないんスよ」

魂魄がないのに、死んではない……？

「どうやら大虚に襲われたようで、微かに霊圧が残ってました」

「大虚……！？」

何故、どうして。

必死に理解しようと、浦原さんの言葉を反芻させる。

ふと脳裏におふくろの姿が過ぎる。

また、護れなかった……？

「なんで……あんなら助けることくらい出来ただろ！？ 何で助けなかった！」

違う。浦原さんのせいではない。そんな事くらい分かっている。

俺のせいだ。

「……すみません。アタシもうつかりしていたもので……大虚から霊圧を感じなかったので出遅れたんす。すみません」

胸倉に掴み掛かって、浦原さんはその手を外そうとしなかった。

やり切れない思いが蟠^{わだかま}る。

「……夏梨に会わせてくれ」

顔が見たい。魂魄がなくても死んでいない事には変わらない。

浦原さんは瞠目した後、静かに頷き引き戸を開けてくれた。

部屋に敷かれた布団の上に、顔面蒼白になった夏梨の姿。

普段からは考えられない痛々しい姿に胸が痛む。

傍らには井上が座し、三天結盾で傷を癒していた。

徐々に血が止まり、傷が塞がっていく。

「黒崎サン、遊子サンには……」

「言えるわけねえだろ……」

「……ですよ。彼女には申し訳ないスけど、こちらで適當にごまかしておきましょう」

パチン、と扇子を閉じる。

俺はそつと夏梨の髪に触れた。

「夏梨サンの魂魄はこちらで捜しますので、アナタは遊子サンの側にいてあげてください。次は彼女が襲われるかもしれないので」

「……分かった。サンキユな」

本当は捜しに行きたい。だが力のない俺では協力するどころか足手

まといにしかならない。

体よく弾き出されたのは分かる。それに従わざるを得ない事も。

（畜生……！）

雨が降っていないのが、せめてもの救いだった。

チリン。

日が沈み、月が顔を出した頃。浦原商店に一匹の黒猫が訪れた。

「こんばんは、夜一さん」

艶やかな漆の毛に賢そうな黄色い目は浦原を見遣り、布団に寝かされた夏梨に近付く。

しばらく彼女の枕元に座りじつと見詰めていたが、不意に頭を上げた。

「このような事が有り得るのか？ この娘、魂魄が入っておらんぞ」

黒猫から発せられた声に驚く様子もなく、浦原は扇子で肩を叩く。

「いや、アタシも信じられないんすけどね。大虚が霊圧を消したのにも驚きましたが」

黄色の瞳が細まった。

「……藍染か？」

「その可能性が高いようで。彼の実験体ですかねえ」

「……して、この娘の魂魄は何処へ行つたのだ」

「アタシの予想としては“虚圏”ウエコムンではないかと」

大虚に襲われて消えた魂魄。単純に考えて連れ去られたのではないか。

だとすれば、虚の住む世界である虚圏にいてと考えて妥当だ。

「夜一さん、明日にでも石田サン達を連れて行ってもらえますか」

「もとよりそれを頼む為に呼んだのだろう？ 断る理由もない。わしに任せておけ」

その言葉のみを残し、黒猫は闇の中へ姿を消した。

つんと鼻にくる鉄の臭い。

浮上した意識と共に身体を襲う激痛。

「　　っ、いてえ……」

夏梨はゆっくりと身体を起こす。

肩と脇腹から流れ出る血に、小さく舌打ちをする。

巨大な化け物に喰われそうになったところまでは覚えている。だがその後、激痛に発狂し意識を失った。

此処は何処なのか。

傷を手で抑え、ゆっくりと辺りを見回す。

そこは随分と寂れていた。所々に建っている古めかしい家は廃れているものが多く、中には半壊している家もある。

「……あの世か？」

いや、それなら痛みなどあるわけない。

ぼんやり眺めていると、背後から足音が近寄ってきた。

そのまま振り返れば、刀を携えた男。

「斬らせろ」

鋭く光る目は獰猛な獣を思わせる。

その男だけではない。何処にいたのか、気付けば夏梨は囲まれていた。

「何だよ、こいつら……」

痛む身体に鞭打ち、ふらつきながらも何とか立ち上がる。

突然の事に混乱する中で、その者達の格好が着物であることに気付く。

夏梨からすれば異様だが、明らかにタンクトップとスパッツ姿の夏梨の方が場から浮いていた。

「殺させる」

「斬らせる」

口々に吐く言葉は呪詛に近い。

逃げられずにいる夏梨に、男が斬り掛かった。

それを合図に次々と男達が刀を振るう。

何とか身を交わすが、避けきれなかった太刀が一線を描き傷を刳る。

「あゝあゝ……っ!!」

焼けるように疼き、激痛に意識を飛ばしそうになる。

死にたくない。

脳裏に浮かぶのは家族の姿。爛漫に微笑む遊子に、死神姿の一護。

まだ、死ねるかよ

黒曜石の目が鋭く光った。その瞬間、空気が波打つ。

刹那。

水の滴る音。

気付いた時には既に夏梨を除いて立っている者はいなかった。

「あ……？」

今、何が起きた？

何の前触れもなくいきなり倒れた男共を見下ろし、眉間に皺を寄せる。

死んではない。意識を失っているだけ。

白目を向いている顔を覗き、頭を軽く叩く。起きる気配はない。

夏梨は着物の袖を刀で裂き、患部にくるくると巻いた。出来れば膿まないうちに消毒もしたかったのだが、このような場所にあるとは思えない。

その村は、よく見れば死体が遺棄されていた。どす黒く染まった地面は血の跡だろう。

襲われたにも関わらず、頭の中はやけに冷静だった。すぐに此処を離れた方が良く、と本能がそう伝える。

夏梨は護身用に刀を持ち、その村を離れた。

乾風が砂を巻き上げる。

程なくして、そこに二人の男が現れた。

「何もいねえじゃん」

黒の死覇装を身に纏い、綺麗に剃られた頭、目尻に朱を挿した男は声を荒げる。

「技術開発局の誤認か？」

「……いや、そうでもないみたいだよ」

切り揃えた黒髪に、眉と睫に羽を付けた優男が、倒れた男達を中心にしゃがみ込む。

「霊庄の名残がある」

つい、と指で地面をなぞる。ゆっくりと顔を上げ、目は静かに森の方を見据える。

「虚か？」

「さあね。どのみち一度戻るよ。もし技術開発局の言った事が本当なら僕達では手に負えないからね」

「追わねえのかよ！　つまらねえ！」

「ほんと、偵察なら他の隊に行かせればいいのにさ」

優男は立ち上がり、今だ気を失くした男の頭を思い切り蹴り上げた。

「しかもこいつら……全っ然美しくないし！　僕の前でよくそんな醜い姿を曝せるよね！」

「その辺にしとけ、弓睦」

ガスガスと頭を蹴り続ける優男、あやせがわ ゆみちか綾瀬川弓睦に疲弊する。

「止めるな、一角！ 白目で倒れるなんて僕を冒瀆してる！」

「いいから行こうぜ。そんな奴等見る必要ねえだろ」

「……………それもそうだね」

些か不満げではあるが、弓睦は渋々ながら頷いた。

坊主頭の男、もとい斑目まだらめ一角は切れ長の目を細め不敵に笑む。

「しかし……………アジューカス中級、ウバーストロード最大で最上並たあ最高じゃねえか」

まるで獲物を見付けた獣のような。

まだ見ぬ相手に心を躍らす。

期待を胸に抱きながら、二人の死神はその場を去った。

北流魂街八十地区“更木”。

偶然か必然か、迷える魂が行き着いた先は最も血で濡れ狂気の渦巻く魂魄の村。

ピシ、

また一つ、齒車は歪こじに回る。

Look for a clue .

延々と続く真つ白な砂漠。

風も太陽もなく、暗い空は虚無をそのまま映し出したよう。

ヒトが考える“地獄”とも違う。だが生きているものにとっては寂寥と孤独を感じずにはいられない。

死んだ世界。そういった意味では、此处、“虚圏”はヒトにとっての地獄とそう変わらないのかもしれない。

「……夏梨ちゃん、何処かなあ」

そう呟く織姫の顔は優れない。石田は平常と変わらず冷静な面持ちで口を開く。

「むやみに搜してもきりがない。一度虚夜宮ラス・ノーチエスに行ってみよう。手掛かりはあるかもしれない」

「わしは初めて来たからのう、案内を頼むぞ」

昨日まで黒猫の姿であった夜一は、今は人間の姿だ。

しほついでん
四楓院夜一。

かつて隠密機動総司令官及び同第一分隊『刑軍』軍団長であり、四大貴族のうちの四楓院家の二十二代目当主。“瞬神”の異名を持つ彼女の速さについて来られる者はいない。

褐色の肌に、猫時同様、黒々とした艶のある髪を後ろに結わえている。

身にぴったりとした衣服は動き易さ重視の為だろうか。

「……………」

夜一の言葉に、石田は黙りこくった。そして鋭い瞳を茶渡に向ける。

「……………」

茶渡の目は穏やかに何処か遠くを見据えている。石田達と目を合わせようとしない。

石田は眼鏡を上げた。

「生憎だが、僕も茶渡も虚夜宮の位置を知らない。それに此処が何処なのかも分からない」

虚夜宮は巨大だ。それは距離感を失わせるほど。

姿は見えど、なかなか辿り着くことは出来ない。前回、茶渡と石田はそれを嫌というほど経験した。

それが、今回はその巨大な建造物の先すら見えない。羅針盤なしに大海へ出るのと同様、完全に遭難した状態だ。

夜一は欠伸をする。

「喜助も使えんのう。場所を固定すれば良いものを」

「それじゃあ私達、迷子なの？」

「……そついう事になる」

茶渡が呟くように肯定した時、すぐ近くで轟音が鳴り響いた。

巻き上がる砂塵。地響き。

「きゃ………」

「虚かのう……？」

構えた夜一に対し、砂煙の中から小さな影が蠢く。

「どわあああああ!!」

「シュシュシュシュ」

「あばばばばば」

小さな身体を追う二つの影に、鰻のような巨体の虚。

その姿を確認した織姫は顔を綻ばせた。

「あ！ ネルちゃんだ！」

「何だ、破面ではないのか？」

「破面なんだけどね……」

夜一の問いに曖昧に答えながら、こちらへ向かって走る影に大声で呼び掛ける。

「ネルちゃああん！」

「な！ そのぐらますな身体は織姫じゃないっすか!？」

翠の髪を揺らせ、意外な人物に会ったと嬉しそうに微笑む。

頭部を覆った髑髏の、落ち窪んだ目がきらりと光った。

“超加速”！

飛び付かんと跳んだ身体は直線を描き、織姫の隣に立っていた石田の胸へと吸い込まれる。

「な、」

「そ、その洗剤のような白さはまさか！」

更にその後につき、白蟻のようなクワガタのような仮面を付けた破面が、後ろへ飛ばされた石田に突進する。

「あばばばばばば」

最後に、咆哮しながら上に跳び上がった破面が押し潰した。

「ちょ、先が当たってる当たってる！」

地面に這いつくばった白蟻のような破面、ペッシェ・ガティーシエは叫んだ。

滅却師特有の武器、銀嶺孤雀の先端が僅かに触れている。

「弓を退きたまえ！ 私と貴様はかつての仲間だろ、一護！」

「雨竜だ！ 何故毎度まちがえるんだ！」

「何イ！？ そ、それでは一護とはいったい……」

「それはオレンジのつんつん頭だと言ってるだろう！
君の頭の中は蟻並に小さいのか！？」

「失敬な！ 私はクワガタだぞ！」

折り合いのつかない言い合いを微笑ましく眺める織姫。彼女の腕の中にはネル・トゥが抱かれている。

「ほう、なかなか興味深い」

まるで良いネタを見付けたとばかりに、夜一は不敵に笑う。

「その白いの！ ペッシェを放すでヤンス！ さもなくばドンド
チャッカ・プレスで」

「君に至っては仲間だったこと忘れてるよね！？」

ドンドチャッカ・ビルスタン。ニメートルを越える巨体に、その身体を半分は覆ってしまう仮面。見開いた目をぎよろつかせ、歯を剥き出した口を全開させ、何でも握り潰せそうな手を上下に動かす。

それを制止しつつ、茶渡は破面の三人に、「良ければまた虚夜宮まで送ってもらいたい」と伝える。

以前、織姫を助けに来た際もこの三人が飼う鰻のような生き物……バワバワに乗せてもらった。

茶渡の提案に、ネル以外の二人顔を強張らせる。

「む、無理だ！ 貴様はあその恐ろしさを知らない！」

「そ、それでヤンス！ それにあそこに行っても何もなくてヤンスよ！？」

夜一の目が不敵に輝いた。

「どのように恐ろしいのじゃ？ そこには何もないのであるう？」

必ず何かある。僅かな手掛かりでも良い。くだらない情報でも、今はないよりましだ。

「吐け。さもなければ実験体として酷い目に遭うぞ」

「ネ、ネルたつに何をする気っスか！？」

「おとなしく吐けば何もせぬわ」

「ネルちゃん、お願い！ 私達、今人を捜してて……どんな情報も欲しいの！」

にんまりと笑う夜一にネルの顔が引き攣る。一方でペッシェとドンドチャツカは尋常でない汗を流す。

織姫は別として、夜一に従わなければならないと、本能が警鐘を鳴らしていた。

「……あそこには」

「ペッシェ！ 言っでヤンスか！？」

「ドンドチャツカ、漢には覚悟を決めなければならない時があるのだ。まさに今がその時。このペッシェ、一張羅の褌に誓って言っぞ

「！」

「御託はいいから早く言え！」

痺れを切らした石田が先を促す。

ペツシエは不満げに何か言いかけたが、夜一に睨まれ慌ててその先を言った。

「私達は見てしまったのだ。ザエルアポロを！」

「アポロ……？」

「誰じゃ」

「……破面か？」

「で？」

ザエルアポロ・グランツ。^{エスパーダ}十刃のNo.8に名を連ね、その高い知力とえぐい能力によって石田は苦戦を強いられた。

だがそれも一年前の話。とある隊長格の死神によって決着はついた。今更話に出される意味が分からない。

「『で?』じゃないでヤンスよ!」

素っ気ない態度に憤慨し、目の穴から涙と思われる液体を垂れ流す。
見れたものではない。

「一護……まさかあいつがどのようにして負けたか忘れたのか!？」

「君は僕の名前をもう忘れたのかい!？」

言い返しながらもふと思い出す。

ザエルアポロが負けた理由。それは死神が作った薬。

『超人薬』。

剣の達人が稀に相手の動きが止まって見えるように、薬を投与された者も同様、相手の動きが遅く見えるようになる。

本来は薄めて使用するはずの薬を、その死神は原液を使った。

よってザエルアポロにとっての一瞬は数百年に及ぶ。

「オラ達が見た時にはまだ立っていたんでヤンス!」

「いくら洗剤のように、白さに誇りを持つ貴様でも、あのグロテスクさには勝てまい!」

石田のこめかみが引き攣る。

「……一つ聞こうか。それを見たのはいつだい？」

「え？ えー……ドンドチャツカ、覚えてるか？」

「覚えてないでヤンス」

ぼけつと間抜け面を曝す二人に、石田は溜め息をつき説明した。

「超人薬は感覚神経と知覚神経に作用する。だから数百年と感じるのは本人だけで、もう霊圧の跡すら遺っていないはずだ」

「甘いぞ雨竜！ 私達の感覚では数百年が一瞬だ！」

「むしろ駄目じゃないか！」

この二人、石田は心底面倒臭そうな表情だが、案外息が合っている。もしかして芸人を目指しているのでは、と考えた織姫はきらきらと目を輝かせる。

「どちらでも良いではないか。さっさと乗せてゆけ」

いつの間にやら、バワバワの頭部に乗っていた夜一は楽しげな顔。

破面の二人は渋々兜を脱いだ。

瓦礫と化した虚夜宮。以前の荘厳な姿は見る影もない。

迷いなく何処かへ向かう石田の後にぞろぞろと続く。織姫とネルはバワバワと待たせてある。あまり虚夜宮には近寄せたくない、ペツシエとドンドチャツカが言ったからだ。

「心当たりがあるのか？」

茶渡の問いに、石田は「いや、」と返す。

「ただ、以前に見た研究所をもう一度見ておこうと思って」

頑丈な扉で守られていたザエルアポロの研究所。ザエルアポロは己の従属官を改造していた。フランシオン浦原の話だと、夏梨を襲ったらしい大虚からは一瞬しか霊圧を感じなかったとのこと。確かに霊圧感知に長けた石田も感じなかった。大虚を改造するなど想像すら出来ないが、

可能性としては十分有り得る。

「なんじゃ、つまらぬ所よのう。それにこのように崩れておって
捜しにくくて仕方ない」

くあ、と欠伸する様は猫のよう。

あまり織姫達を待たせても、虚に襲われたら危ないと、
急ぎ足で記憶していた場所に向かう。

カツ。

「やあ、随分と懐かしい顔があるね」

振り向いたところにそいつは居た。

Look for a clue・(後書き)

なんか……茶渡が空気になってる(汗)

みんな口調が難しいです……

なんか話が進んでいるのかいないのか(笑)

次章は一護のターンです。原作に突っ込みますが、都合上ちよこちよこ変わります。

t r e s p a s s e r

誰が行方不明だとか、誰が殺されたとか、騒がれるのはほんの一時で。報道されるのはごく一部で。

「一護、『鉄拳』持ってきた？」

何かが変わるわけでもない。

それでも、彼を取り巻く世界は回っていく。

「やべ、持ってくるの忘れた。明日持ってくる」

がさがさと鞆の中を探る指先に何かが触れる。

五角形の、髑髏を模したような柄の板。かつて彼が死神であった証し。死神代行として渡されたそれは、一年前まで虚探知と“死神化”の役割を担っていたが、死神の力を失った頃から機能しなくなった。

今ではただの板切れと同じだ。

それでも手放せないのは、今もまだ諦めきれていないのかもしれない。

い。

何も出来ない自分が齒痒い。

「なに、あんたまだそれ持ってたんだ」

ひょい、と身を乗り出し鞆の中を覗く。

「んだよ、悪いかよ」

「別に。何を持っていようがその人の自由だし。でもさ、ホントにいいの？」

このままで。

力を失くしたままで。

「……おまえに関係ないだろ」

痛いところを突かれた。長年の付き合いなだけ、彼女は一護を見抜いている。

力を欲したところで戻るはずがない。そんな簡単な事で戻るなら、とうの昔に戻っている。

つつけんどんに言い放てば、彼女の眉間に皺が寄った。

「それ、次言ったら殴るから」

“関係ない”。一番言われたくない言葉。

小さい頃から共にいた彼女、有沢竜貴にとって、これほど苛立ちを覚える言葉は他にない。

一護の母が亡くなった当時を知るからこそ、余計にそう思うのかもしれない。

「あたしは確かに力にはなれないだろうけど、腑抜けたあんたをほっとくほど落ちぶれちゃいないよ。何なら今此处でぶん殴って目を覚まさせてやるつか」

ポキポキと指を鳴らす竜貴に対し、一護はぼんやりとそれを見た後、
「次の授業サボるわ」と教室を出ていった。

「……ありや予想以上に重症だわ」

教室のドアを見詰めながら溜め息をつく。そして彼女の親友である織姫の席を見て呟いた。

「また面倒な事に巻き込まれたりして」

この時は軽い冗談のはずだった。

「黒崎先輩、来週宮校と練習試合があり、指導をして頂きたい……」

深々と頭を下げたのは男子バスケット部の部長。一護は見定めるように目を細める。

「いくらだ」

「一万で！」

射抜くような目付きに気が気でない。冷や汗が頬を伝う。

一護は低く唸る。

「条件は“勝てるようにすること”だろ？
人数は十五人。安いな」

「で、では一万五千で」

「割に合わねえ」

「二万！」

釣り上がる金額。結局、二万五千で一護は妥協した。

引き受けたからには必ず勝たせる。それが成し得なければ金は受け取らない。

「やべっ、一護のやつ引き受けちったぜ！ 一週間暇じゃん！」

“取引”の現場をこっそり覗いていた浅野啓吾は舌打ちをする。

さまざまな過程を経て黒髪のストレートに落ち着いたその頭は、見事なまでに顔とミスマッチしている。

「一護も大変だね。去年は去年で動き回って、今年は資金集めなんてさ」

隣で小島水色が呟いた言葉に啓吾も同意する。

啓吾に水色、そして竜貴。彼等は一護が死神であったことを知っている。そして何度か命も狙われた。

「……………ていうか、何の資金？」

「さあ。卒業した後のじゃない？」

一年前の真相を知る彼等にとって、一護が“普通”に戻ったのは嬉しい事ではあった。自分達の知らないところで、自分達を護る為に傷付いては欲しくない。だからといって、時折ぼうつと空を見上げる彼を見たいとは思っていない。

最近バイトも始め、忙しさにそういった表情を見せることも少なくなっただが、いつでも“見えない何か”を探しているのは知っている。

「なあ、啓吾」

商談を終えた彼が啓吾を呼ぶ。

「おまえさ、死神とか虚とか見えるんだよな？」

「え、まあ……………」

「霊圧を感じたりは？」

「何となく、ぼやけた程度には感じるけど……………何で？」

切羽詰まったような一護の顔に戸惑いを隠せない。今までそちらの話は自分から避けていたのに。

「夏梨の霊圧、分かるか？」

「夏梨て妹だよな？ 黒い方の」

どうかしたのか？

そう問えば、「いや……」と歯切れを悪くする。

「家出？」

「そんなんじゃない」

水色が聞いても答えようとしない。

誰にでも言いたくないことの一つや二つはある。家庭の事情なんて以っての外。だが二人は直感で“あちら”の関係だと分かった。

一護は困った事があっても胸の内に仕舞って明かそうとしない。特に霊的なものについては。

だから彼等が死神や虚について知ったのは一護が死神になって随分

経ってからだし、教えてもらったのではなく跡をつけて探ったから。それまで、頻繁に見るようになった黒い着物の者や彼等が戦っている白い化け物が何なのか知らなかった。

「ふうん」

そういうところが、無性にもどかしかったり。

「ま、何か見つけたら連絡するってことで。そろそろ帰ろう」

それでも追及はしない。教えてくれないなら自分で答えを見付ける。それが水色のやり方。

悪いな、と申し訳なさそうに謝る一護と不満たらたらな啓吾と共に教室を出る。

時計の針は四時半を指していた。

水色、啓吾と別れ、家までの短い距離を歩く。

今日、織姫や石田、茶渡は学校に来ていなかった。

考えられるのは夏梨の件。浦原が捜すと言っていたが、織姫達にも手伝ってもらっているのだろう。

死神の手は借りられないから。

一護は拳を握る。

悔しくて堪らない。

霊が見えない生活は憧れだった。安らかな、安穩な生活。だが、妹ですら護れないのなら、そんな生活はいらない。

護らなくてはいけない辛さよりも、護れない辛さは遥かに勝る。

「一護」

家が見えてきたところで、門前に見慣れた人影。

「たつき」

「一護、ちょっと面貸しな」

そう言って、竜貴に連れられて来たのは川原だった。

母を亡くした、あの川原。

『母ちゃん』

今だに鮮明に残る記憶。

竜貴は腰に手を当て、感慨深げに溜め息を漏らす。

「あんたの悪いところだね」

「……何が」

不機嫌に顔をしかめる一護を一瞥し、川に石を投げ込む。

「一人で背負い込むとこ」

石は波紋を描き沈んでいった。

「夏梨ちゃんがいなくなっただんだ？」

「……」

一護は答えない。

誰から聞いた、と問い詰めようにも心当たりがありすぎる。

さしずめ啓吾か水色が言ったのだろう。

「虚に襲われたんだってね」

否、これは水色か。啓吾はそれほど鋭くない。

「何で教えてくれないのさ。あたし達ってそんなに頼りない？」

そうではない。巻き込みたくないだけ。いつぞやのように、殺されかけるなんて事が起きてほしくないだけ。ただ、それだけ。

もともと霊や虚が見えなかった竜貴達が死神まで見えるようになったのは、一護自身の高い霊力と死神化が原因だ。それさえなければ敵に目を付けられることもなかった。

だから、これ以上巻き込むわけにはいかない。

「これは俺の問題だから、おまえらには関係ないんだよ」

嗚呼、殴られるな。

そう思った次の瞬間、鈍い音と共に竜貴の拳は的確に一護の頬を捕らえた。

「ふざけんな……」

怒りに満ちた顔。こんな顔をさせるのは一年ぶりか、などと考えている間に彼女は詰め寄り胸倉を掴み上げる。

「あんたのそういうところがむかつくだよ！！ あたしらには関係ないだあ！？ ふざけてんの！？」

「……ふざけてねえよ」

「ふざけてんだろ！！ あんたは関係なかった織姫を巻き込んだ。あたしだって巻き込まれる権利はある！」

「莫迦言ってんじゃないやねえ！ 権利とか、そういう問題じゃねえんだよ！」

「莫迦言ってんのはあんたでしょ！？ 巻き込まれたのは織姫だけじゃない、夏梨ちゃんだってそうよ！ それにあんただって」

『今回の事は、全部藍染て奴が原因だったんだ』

語られる真相。それは彼が掌で躍らされたという事実。

「あんただって巻き込まれたんじゃないの!!」

この世に生まれ落ちたその瞬間から、彼の運命は道を外れた。偶然重なったように思えた出来事も全て必然。

憐れな、悲しい事実。

「力がないくせに意気がつてさ……莫迦じゃないの」

俯いた顔は見えない。

彼女にとって、一護は只の仲間でも友達でもない。言葉では言い表せないような、どちらかといえば兄弟に近い関係。

だからこそ、水色や啓吾が踏み入れない一步を踏み入れる。

「あたしも手伝うからさ、変に遠慮しないでよ。人数は多い方がいいに決まってるんだから」

ぶっきらぼうに呟いたその言葉は、確かに一護の耳に届いた。

「どうだった？ 彼は」

薄暗い、マンションの一室。

仄かに照らされた影。来訪者はその影に向かって不敵に微笑む。

「いいんじゃないの？ 奴はいま力を求めてる。俺らにとってもちようどいい」

そうか、と紅茶を口に含みながら本をめくる。

そしてパタンと閉じると立ち上がった。

「それじゃあ、そろそろ始めようか」

You don't know that the fate is always

「おかえり、お兄ちゃん！」

竜貴と別れ、家に帰った一護を遊子が迎える。

味噌汁の匂いが鼻孔を擽った。

「夏梨ちゃんいいなあ！ ジン太君や雨ちゃんと一緒にお被いの修業でしょ？ 岩手なんて行ったことないのに。一緒に行きたかったなあ」

いつも一緒にいたから、一人きりになるのに寂しさを感じるのかもしれない。

もちろん、修業に岩手へ向かったというのは嘘だ。いかにして遊子を心配させないか、浦原と相談した結果。

案の定、微塵の疑いも持たずにその話を信じた。

罪悪感を煽る。

「遊子、悪い。夕飯いいや」

そついう気分ではない。

心配そつに顔を歪めた遊子が何か言つ前にそそくさと自室へ竈つた。乱暴にベッドへ身を投げだし、ぼんやりと天井を見上げる。

どうすればいい？

答えの出ない自問自答。ぐるぐると混濁する頭の中に、微かに救急車の音が響いた。

一護は不快に鳴り続ける耳障りな音に目を覚ました。それが携帯の着信音と分かるとすぐに電話に出る。

外は真つ暗だった。夜中とも言える遅い時間に誰だろうか、そう疑問に感じた彼の耳に飛び込んできたのは、学校を休んでいた織姫の声。

彼女の言葉を聞いた瞬間、一護の頭の中は真つ白になった。

「すぐに向かう！」

その一言で電話を切り、パーカーを羽織りながら階段を駆け降りる。

「お兄ちゃん……!？」

驚いた声を出す遊子に答える暇もなく、一護は家を飛び出した。

向かう先は空座総合病院。

面会時間はとうに過ぎているのに入れたのは院長の計らいだろう。
電話越しで聞いた番号の部屋へ向かう。

「黒崎君！」

「井上、チャド。石田は……」

学校に来ていなかった三人が此処にいる。カーテン越しに映る影が
舌打ちをした。

「よりによつて黒崎を呼んだのか」

「う、うん。知らせておいた方がいいかなって」

「おい……何があつたんだ」

何故、雨竜が病院に運ばれ、目の前で横たわっているのか。一護に

一つの不安が過ぎる。

「言っておくが、君の妹の捜索中に傷を負ったわけじゃない。僕の不注意だ」

そう言われても納得しきれず、顔を歪める気配を感じ取ったのか雨竜は更に続けた。

「報告だ。君の妹を襲ったのは只の大虚じゃない」

「……どういう事だ」

「生憎、詳しい事は分からなかったんだが。一つ言えるのは、その大虚が襲うのは人間だけじゃない。今、虚圏でも無差別に虚が喰われているらしい」

虚が虚を喰らう。それは己の欲を埋めるため。

愚鈍とも呼ばれる大虚が他の虚を喰らうというのは、即ちその大虚に意思があるということ。

稀に見る、破面の始まりだ。

だが雨竜はその考えを否定した。

「どうやら、そうでもないみたいだ。アレはもともと実験体で、一ヶ月ほど前に盗まれた……逃げされた、と言った方が適切か」

「実験体……逃げされた？　ちょっと待てよ、いったい誰から聞いたんだ！？」

まるで実験の関係者のような口振り。いったい何処からそのような情報を掴んだのか。

声を荒げる一護に、織姫は口を開けかけ再び閉じる。

言すべきか迷っている。今、言っている事なのか。

「静かにしまえ。此处は病院だ」

静かに部屋に入ってきた院長、竜弦に嗜められ、渋々と閉口する。

「黒崎、もう帰ってくれないか。少し疲れた」

仮にこのまま居座り、雨竜に問い詰めたとして、自分に何ができるだろうか。

悔しい。悔しくて、力のない自分を呪う。

「……明日、また来る」

また来てどうする。おまえには何も出来ないだろう。

そんな声が聞こえた気がした。

一転して静かになった部屋の中、コチコチと時計が針を進める。

「石田君、その傷、誰にやられたの？」

虚圏から戻った彼等は、浦原に一通り説明した後、その場で解散した。一護への報告は雨竜が行くはずだった。

「分からない。僕としたことが、完全に油断していた」

カーテン越しにそう言葉を噛み締める。

“ 分からない”。

それ以上聞くな、と含んだように言う。織姫は肩を竦めた。己の力で傷を治すことなど造作ない。だが、それさえも拒否されては為す術もない。

茶渡は黙って様子を見ていたが、断固として「分からない」「帰ってくれ」と崩さない雨竜の言葉に従った。

雨竜は頭が切れる。自分では分からない何かに気付いての言葉だろう。

織姫と、彼女を連れ部屋を出て行く茶渡に雨竜は呟くように言った。

「油断するな。奴らの力は虚に近い。気を付けろ」

我無沙羅に走った。それでもやはり頭の中は混沌としていて。

不安や自責が蟠り、叫びそうになる衝動を必死に押さえ込む。

せめて、霊圧だけでも探れたら

気付かないうちに、夏梨が襲われたと言っていた場所にいた。

灰色の道路にこびりついた僅かな血痕。夏梨の血。

（一護。）

不意に呼ばれた気がして、はっと顔を上げれば電柱の影に懐かしい母の姿を見た気がした。

何故だろうか、すぐに錯覚だと気付いたが、身体が小さく震えていた。

「黒崎一護……か？」

背後から掛けられた声に振り返る。錯覚ではない、立っていたのは大柄の男。見覚えはない。

誰だ、と問う前に、髪を後ろへ流したその男が口を開いた。

「話したい。おまえにとって重要な話だ」

「……誰だよ、あんた」

突然のことに警戒心を剥き出しにする。何より名前を知られている

という事に一抹の不安を感じる。

「そう警戒するな。俺はあんたに協力したいんだ」

「……」

「死神の力、取り戻したくねえか？」

ヒュツと息が鳴った。一護にとっては又とない話。だが同時に警戒も強まる。

何故、この男が己の名前を知っているのか。

何故、死神であつた事を知っているのか。

何故、協力してくれるのか。

何故、このタイミングなのか。

「俺達は完現術^{フルプリング}という力を使う能力者だ。黒崎一護、あんたに頼みがある」

完現術。全く聞いたことのない言葉。

“俺達”と言う辺りから集団であることに間違いはないだろうが得体の知れない。

「この力を貰ってほしい」

「……どういう事だ」

「おまえは今狙われている。元は俺達の仲間だった奴にだ」

「俺が狙われてる……？ 何で俺が狙われなきゃならねえんだ」

話の筋が見えてこない。以前のように莫大な霊力を垂れ流しにしていたなら何となくは分かる。だが今はその欠片すらないというのに。

「だいたい俺は死神の力を完璧に失っ」

「失ってはいないさ」

男の胸元で、十字架を模したアクセサリーが跳ねる。

「僅かにだが、確かにおまえな中にある。眠りについたただけだ」

信じられない話だった。完全に消滅したと思っていた。もう、戻れないと諦めかけていた。

“もしも力が戻るのなら”

ただの絵空事でしかなかった。

白黒に見えた世界が彩られていく。

「あんたの名前は……？」

信じていいのか。期待していいのか。

「銀城空吾だ」

「よいしょっと」

浦原は暗い部屋に匣のような、巨大な装置を置いた。それを見て、猫の姿の夜一は退屈そうに欠伸を繰り返す。

「ようやくか」

「ええ、まだ調整は必要ですが」

ぽんぽんと軽く叩き、俄かに笑った。

暗闇の中で、夜一の黄色い目が煌めく。

「長かったのう」

「そうっすね。でもこれでやっと……」

満足げに微笑みを浮かべる浦原に、夜一は尻尾をはたはたと揺らし、匣の上に飛び乗った。

「あやつとは話をつけたのか？」

「はい。早くて明日、遅くても三日後には始められますね」

深く帽子をかぶり直す。すると彼の月色の瞳が隣の部屋へ移った。

そこに見えるのは依然として布団に横たえた、からっぽの夏梨の身体。

襟元がじわじわと朱に染まっていく。

「まずい……！ 鉄裁！」

張り上げた声に奥から現れた儼つい筋肉隆々な大男。

「鉄裁、すぐに彼女の治療を！ 終わったらすぐに結界を張ってください！」

「承知しました！」

ダラダラと垂れる血に布団が汚れていく。

浦原は眉を潜めた。

夏梨の身体と魂魄は完全に離れてしまっている。因果の鎖も見受けられない。

だが、本体の方から流血したということは魂魄も傷付いたと考えて間違いはないはず。

「大虚……藍染の実験体……」

霊圧の非探知。生体からの魂魄の離脱。

何かが引っ掛かる。何かを見落としている気がする。

重大な何かを。

「夜一サン。明日に彼等を連れて来てもらってもいいっすか」

夜一は二つ返事を返し、すっと消えた。

彼等は知らない。

運命とは、神とは、常に残酷なのだ。

Y o u d o n ' t k n o w t h a t t h e f a t e i s a l w a y s

ぐだぐだで申し訳ないです…；

なかなか思うように進まない…

次はちよこつと一護出したら夏梨ちゃんのターンになると思います。

死神さん達の口調が不安です（）。　。　；　（　）

あ、育美さん出すの忘れた。

The approaching danger

黒い色調の部屋。窓はなく、その上少ない照明によって部屋の中は薄暗い。

「座れよ」

席へ促した銀城に対し、一護は扉の前で立ち尽くしたまま。

「俺は遊びにきたんじゃない。早く説明しろよ」

まだこの男を信用はしていない。疑問がありすぎる。

それでもついて来たのは僅かでもいい、希望を見出だしたいから。

「そう焦るな。沓沢、何か飲み物を」

そう言われれば、カウンターにいるバトラーのような男がグラスに飲み物を注ぎ、テーブルの上に置く。

彼も仲間だろうか、と頭を巡らせていると銀城は話し始めた。

「さっきも言った通り、俺達は完現術を使う。そこにいる沓沢、ジヤッキー、雪緒……あと此処にはいないがリルカも仲間だ」

完現術。それはいったい何なのか。

見てろ、と言った後、銀城はグラスに手を翳した。グラスの中で小さな光がチカチカと瞬く。

表面に波紋が出来たと思えば、液体は固体のように形作り、そのまま銀城の口の中へ吸い込まれていった。

「今のは……」

「“グラスの中の酒”の“魂”を引き出し使役したんだ」

ガラン、と飲む物がなくなったグラスの中で氷が音を立てる。

「俺達能力は“物質”に宿る“魂”を引き出して使役することだ」

銀城は首に掛けている十字架のネックレスに触れる。

「そして、愛着が強ければ強いほど、形を変える事だって出来る」

次の瞬間、十字架だったそれは巨大な大剣に変わった。

刃先が床に突き刺さり、それが玩具でないことがよく分かる。

「あんたらは……人間か……？」

愕然とする一護に、銀城は笑った。

「人間だ。だが“ただの”人間じゃない。俺達の共通点は、親親が虚に襲われたこと」

大剣は光を放ち、再び小さな十字架に戻る。

銀城から返ってきた答えは予想外の言葉だった。

「この能力は虚の力の痕跡だ。俺達は生まれながらにして普通の人間じゃなかった」

それは、死神と人間の力を併せ持った一護と相反する存在。

そして織姫や茶渡と同じ。

「……それと死神の力、どう関係するんだ」

「完現術は、俺達と真逆の人間になら力の譲渡が出来る。おまえみたいなのは、死神と人間の力を持っている奴だ。だが、その為にはおまえ自身の完現術を使えるようにしなきゃならない。完現術を完成させれば、おまえの中の眠った霊圧を刺激し覚醒させられるはずだ」

静かな色を燈した目は、しかと一護を見据える。

はたして可能なのだろうか。

だが、かつては一護も虚の力を持っていた。不可能とは断言できない。

もしそれが本当なら、また皆を護れるのだろうか。

夏梨を助けることが出来るのだろうか。

「前置きが長くなっちゃったな。ここからが本題だ。理解できてるか？」

「ああ……」

一護は扉から離れ、銀城の向かい側に座る。

「おまえを狙っている奴がいる。いや、正確に言えばおまえの中に潜在している完現術をだ。名前は月島秀九郎。かつて俺達のリーダーだった」

「何で俺が狙われなきゃならない。まだその完現術すら持っていないだぞ」

「おまえの力が強大だからだ。それしか考えられねえ。奴に何か策があるのか知らねえが、じゃなきゃおまえの仲間を襲ったりはしねえだろ」

目を見開く。

彼は今、何と言った？

「そいつが、石田を襲ったってのか!？」

雨竜は、襲われたのは関係ないと言っていた。

とんでもない。関係ないどころか、自分のせいで傷付いたのだ。

「落ち着けよ。敵を知っている以上、打つ手はたくさんある」

「落ち着けるかよ!! 俺のせいで仲間が傷付いたんだぞ!!」

激昂する一護とは裏腹に、銀城は酷く落ち着いていた。

「だから、月島を越える力を手に入れるんだ。死神の力におまえの完現術、それに俺達のを譲渡できれば月島に対抗できる」

その時、勢いよく扉が開いた。

「連れてきたわ！ ていうか何であたしが行かされたわけ！？ えらっそうに寛いでんじやないわよ！」

そこから入ってきた少女は長いツインテールを揺らし、きつい目元をさらに吊り上げ銀城を睨む。

高い声で叫ぶ彼女を見て、それから視線を背後に移す。

「井上……チャド……！！」

「おまえの仲間が狙われるって分かったんだ。勝手ながら連れて来させてもらった」

「一護、これはいい……」

茶渡も井上も戸惑いを隠せない。

銀城は立ち上がった。

「黒崎一護、おまえの返事を聞きたい」

「俺は」

薄暗い洞窟の中で朝を迎える。

地面が固いせいか、身体はガチガチに固まっていた。

夏梨は傍らに置いてある刀を見ると眉間に皺を寄せる。

はたして、こんな形だっただろうか。

鈍色に光る大刀。にひいろ曖昧な記憶を手繰り寄せるが、違ったような気もするし、このようだった気もする。

どのみち使えないわけではない。ただ大きさに支障は出るかもしれないが。

「の……は……」

洞窟の外から微かに声が聞こえてきた。それから複数の足音。

昨日の事もあってか思わず身を固くし、身の丈ほどの大刀を構える。

予想外に軽かった。軽い、というよりむしろ重さを感じない。だが、こんな狭い洞窟の中では振ることさえ出来ない。

外からの光に、刀は虹色に反射する。

「この辺りから感じるんだが……」

「阿散井君。この洞窟……」

足音がぴたりと止まる。夏梨の額から汗が落ちる。

「この中からか」

確実に見付かる。見付かったらどうなるのだろう。

洞窟の前からピリピリと肌に感じる、大きな二つの気配。そこに新たに二つ加わる。

「恋次、見付けたか」

「一角さん。恐らくこの中に」

じつと洞窟の入口を見据える。緊張で手が汗ばむ。

ほとんど見付かったも同然、無駄な足掻きはしないで大人しく出ていった方がいいのかもしれない。

それでも一歩が踏み出せないのは、昨日の男達が脳裏を掠めるから。

「おーい、中に居るんだろ。痛い目見たくなかったら出てこいや」

「いや、虚相手にんな事言っても仕方ないでしょ……」

どうしたらいいのだろう。ぐるぐる思考を巡らす、ろくな案が見付からない。

夏梨はそろりと洞窟から出た。

「は……餓鬼……？」

穴の前に立っていた赤髪の男が目を丸くする。

彼だけではない。その隣にいた金髪の男も、他一人も同様だった。

「出てきたよ。で、逃がしてくれるの？」

勝ち気な目。一方で逃がしてくれない場合を想定し、逃げ道を確認する。

「あ、ああ……いや、そういうわけには……」

「その刀は君の？」

金髪の、やるせない顔の男にそう尋ねられ、首を横に振る。

「拾った。というより奪った」

「君……凄いことするね」

黒髪の、綾瀬川弓親は瞠目する。

一角は面白そうに笑った。

「にしても、おまえ人間だよな？　なんで現世の服を着ている？」

タンクトップ姿の夏梨を赤髪　阿散井恋次が訝しげに見る。

夏梨は肩を竦めた。自分でも分からないのに答えようがない。ただ、今いるこの世界が兄と同じ死神の世界であることにほんの少しの安堵を覚える。

「あたしもよく分からないんだ。いきなり化け物が　」

その時、ズンと空気がのしかかった。

この重圧には身に覚えがある。いつの間にか塞がりかかった疵に触れる。

「おい、どうした」

いきなり黙り込んだ夏梨に対し、彼等は怪訝な顔付き。

「どうしたって……これ、感じないの!?!」

(いんなに息苦しいのに!)

刀を持つ手が震える。

オオオオオオオオオオオオ!

地の底から轟くような声が空気を貫く。しかし、依然として彼等に
気付いた様子はない。

「ッ、後ろ!」

奇怪な面の大虚は、その巨体を現した。

「ああ? 何もいねえじゃねえか」

見えていない。聞こえていない。彼等は大虚の存在すら認識して
いない。

どういうことだ、と自問する。以前に死神姿の兄を見た時はあのよ
うな化け物を斬っていた。一護の仲間である死神である彼等が感知でき
ないなんてないはず。

(夢? 幻覚?)

そう疑うが、肩に残る疵跡がずくりと疼く。

大虚は大きな口を開く。

考えるよりも身体が動いていた。

「この野郎！」

恋次の前に飛び出し、攻撃を刀で受け止める。だが、夏梨の身体は難無くぶっ飛ばされた。

地面に強く打ち付け、痛さに小さく唸る。

「な……！？」

「君、大丈夫！？ 何があつたんだ！？」

金髪の吉良イツルが駆け寄る。

「莫迦！ 右から来てるよ！」

夏梨の言葉と同時に後ろへ飛び退く。べこん、と地面が凹んだ。

その間に一角が夏梨を担ぎ上げる。

「おい、何なんだこれは」

「あの白い仮面の化け物だよ。あんたらの専門だろ！？　なんでアレが見えないんだよ！！」

「君には見えてるのかい？」

弓親の言葉に頷く。

夏梨は顔を陰しくした。

「あたし、アレに襲われたんだ。喰われたと思ってたのに、気付いたら此処にいた……赤髪のおっさん、前だ！！」

そう言った瞬間、吹き飛んだのは夏梨を抱えた一角だった。

一角の腕から離れ、再び打ち付けられた衝撃に息が詰まる。

もう一匹、そこには虚がいた。

「いつて……なんだあ？」

「もう一匹いたんだ……」

唇を噛む。立ち上がり一角のもとへ駆け寄る。

「坊主のおっさん！ 大丈夫か！？」

「当たり前だ。こんなでくたばるわけないだろ」

頭から血を流しても不敵に笑う。夏梨は小さく息を吐く。

「赤と金パのおっさんも！ あたしが指示出すから固まって！」

「誰がおっさんだ！」

「お、おっさん……」

「あたしからしたら十分おっさんだっの。ていうか右！」

腕を振り上げ突進してくる虚に対し、恋次は刀を抜く。

「吠えろ、『蛇尾丸』！！」

口上と共に刀の形態が変わる。蛇腹になった刀身は夏梨の示した方向へ向かう。

「おかっぱ、後ろから来てるよ！」

「くそっ」

舌打ちをし、大虚の攻撃を何とか薙ぎ払う。

夏梨の指示は的確だった。だが、見えない感じない彼等は手応えのみを頼り、決定打を打てない。

とうとう弓親が攻撃を喰らった。

(……無理だ、あたし一人で動かすなんて……)

せめて、彼等にも見えるようになれば……

「っ、うあー!!」

「おい餓鬼!!」

油断していたところに虚の爪が襲う。

塞がりかけていた疵がぱっくりと開く。

『夏梨』

声が聞こえた。

The approaching danger (後書き)

完現術の説明はしょっちゃいました；；

漫画見返してみたらかなり長くて……

それと一角って恋次のこと何て呼んでたっけ？

難しい……

とりあえず、夏梨ちゃんを出せてよかった（´、*）

f l o w e r (前書き)

f l o w e r

花が咲く

目覚める

f l o w e r

『夏梨ちゃん、早く早く!』

ほとんど消えかかっていた遠い記憶。

お母さんと遊子と一兄、それにヒゲと公園を歩いていた時の。

家族が揃っていた時の、唯一の思い出。

今より小さい遊子があたしを引っ張る。

『待つて、一兄も』

やっぱり小さいあたしは一兄の手を引く。その後ろからお母さんとヒゲ。

みんな笑ってて、すごく幸せそうだと思った。一兄なんか今と違って眉間に皺が寄っていないし、何より写真じゃないお母さんの笑顔を見て嬉しい。

ヒゲはいつもと一緒だけど。

『わあ！ お花が水に浮いてる！』

遊子達はそこそこ大きい池を覗いていた。

水面には白い蓮の花。

『ほんとだ。変なの』

素直じゃないな。ホントは可愛いつて思ってたのにな。

『変じゃないよ！ 可愛いよ！』

ほら、遊子がムツとしてる。あたしはそれでもなんか照れ臭くて、
『変だよ』ってふて腐れる。

一兄がお母さんを連れてきた。

『母ちゃん、この花なあに？』

『これはね、蓮華っていうの。可愛いお花でしょう？』

お母さんもあたし達と同じようにしゃがむ。

『蓮華はね、どんなに汚い水でも、それに染まらず綺麗に咲くの』

その時、池の水が盛り上がった。

洪水みたいに大きな波にのまれる。思わず目をつぶった。

こんな事はなかったはずだけど。

口の中に水が入る。ちょっとやばい気がする、そう思って鬱すら目を開けてみる。相変わらず水の中。

底も水面も見えない。かなり深いのかな。光はすごく差してくるけど。

『夏梨』

また呼ばれた。後ろを振り返ると何も変わらない、お母さんの姿。

呼びたいけど水の中だから息出来ないし、そろそろきつくなってきた。

夢の中だろうけど、呼吸って出来ないかな？

少し息を吐いて、吸ってみる。口からゴボゴボと泡が出たけどちゃんと呼吸は出来た。試してみるもんだね。

「お母さん」

呼んでみる。お母さんはふんわり笑った。大好きだった笑顔。

『夏梨、呼んで』

え、なに？ 今呼んだじゃん。

「お母さん」

もう一回言つと、小さく首を振った。違つて言われても、他に何て呼べばいいか分からない。

『夏梨、名前を呼んで』

名前……

ちょっと、ていうか、かなり気が引けるよ。それに“真咲”なんて呼んだことないし……

瞬間、頭の中に声が響いた。

これが、お母さんの名前？

どついう意味が全然分からないけど、優しく笑うお母さんに向かって、その名前を呼んだ。

「おい、餓鬼！ 返事しろ！！」

「吉良、まだ治んねえのか！？」

「待ってください、もう少し……」

気を失った夏梨に背を向け、必死に攻撃を防ごうとする。

だが気配すら感じられない彼等に防げるわけがなかった。いたぶるような攻撃に、まだ動くことは出来るが確実に疵は増えていく。

「一角、目の前の砂が動いたよ」

「ああ……」

頬から伝う血を嘗め取り、己の槍を構える。こんな状況でも笑って
いられるのは、彼の喧嘩好きな性格のせいだろう。

背後で夏梨の治療をする吉良の額から汗が落ちる。

ぴくりと夏梨の指が動いた。

それを見て小さく安堵する。

「……………かい」

微かに聞こえた声に吉良は耳を傾けた。

夏梨の手がしっかりと刀の柄を握る。

「『流水・蓮荷真咲』るすい・れんかまさき」

「え、」

膨れ上がる霊圧。水の滴る音と共に波紋が広がる。

思わず目を閉じる。だがそれも一瞬の出来事で、次に目を開けると
彼等は驚愕した。

まるで水の中にいるような感覚。とは言っても身体はむしろ軽い。

空を仰げば、巨大な蓮の蕾が逆さに垂れ、そこから滴る水は波紋を
つくる。

そして何より、大虚等が姿を見せていた。

瀟霊挺の中は騒然としていた。

「隊長！ 流魂街の方から……」

「ええ、分かってますよ」

皆、隊舎から出てきて一つの方角を見据える。

「総隊長……」

「……見事なり」

皆が見つめる方向。そこには巨大な蓮華が咲いていた。

「なにこれ、どうなってんの？」

目の前の光景に夏梨は呆然とした。

ふと手元を見る。鈍色だった大刀は脇挿しの大きさになり、白銀を放っている。

あの、空に浮いている白蓮はなんだろう。首を傾げる。

「……すごいね、君」

吉良はおののいた。

まさかこんな子供が……しかも生きているはずの人間が死神の力を手にしているとは思っていなかった。

それに

「正解だよ、これ」

「ばん……？ なにそれ」

きょんとする夏梨に彼は再び瞠目した。

「おい！ おまえら退け！！ 虚閃セロが来るぞ！！」

恋次が怒鳴る。我に返って見れば、大虚の口に光が集まっている。

あれはやばい。直感でそう感じ、急いで後退する。

だがそれよりも早く虚閃が放たれた。

その大きさも速さも異常だった。吉良に抱え込まれた瞬間、目の前が真っ白になる。

轟音と、強烈な光。それも少しすると徐々に消えていった。

疵一つ負わず、呆気ない攻撃に夏梨は拍子抜けする。

「おまえら無事か!？」

「無事、みたいです……」

「ねえ、今のつて何だったの？ ただの不発？」

「いや、ちゃんとした攻撃のはずだけど……どうなってるんだろう」

何が起きている？

この子はいったい何者だ？

混乱する頭。それでも虚の攻撃に太刀打ちする。

夏梨はじつと戦う彼等を見詰めていた。己より巨大な化け物に挑む姿。そこに一護が重なる。

此処でも、あたしは護られるのか。

虚は別として、大虚の敵意は明らかに夏梨に向いている。それを食い止めているのは一角と恋次。

虚へは弓親と吉良が応戦している。

むず痒い。

せめて自分の身くらい自分で護れるようになりたい。

『大丈夫』

力一杯握りしめた拳を、傍らに現れた真咲がそっと包み込む。

『夏梨』

虚の面が、獲物を見付けたとばかりに夏梨の方へ向いた。

巨体にそぐわない速さで弓親達を振り切り接近する。

『退いてはだめよ。一歩、前へ出るの。大丈夫、此処はあなたの領域だもの』

「うん」

刀を反転させると、白銀の刃が光る。

一歩前へ。虚との距離がどんどん縮まる。

何となく、この刀にどういう力があるのか分かった。

夏梨は勝ち気な黒曜石の瞳で見据え、静かに言霊を発した。

「『へんかびやくれん反花白蓮』」

刀身が砕け散り、空に浮いていた蓮の蕾が一気に花開く。

ビキリ。

虚の身体に、仮面に、ひび輝が入った。夏梨が腕を動かすとその輝は広がる。

虚は腕を伸ばす。掻き爪のついた手が夏梨を引き裂こうと高く振り上げられる。

「危ない！」

吉良が瞬歩で虚と夏梨の間合いに入る。

爪と吉良の刀が交えようとした時、虚の全身がひび割れ、

「……じゃあね」

粉々に砕けた。

破片も残さず、さらさらと砂のように形を崩し、それも完全に消える。

信じられなかった。こんな技は見たこともない。

（斬魄刀の能力にしてもこんな事って……）

周囲の水が柄に集まり、もとの刀身を形作る様を見て、自分より小さな少女に畏縮する。

「怪我はないかい？」

どこか疑うような目で、しかし心配の言葉を吐く弓親に夏梨は半眼になった。

「ずっと後ろで見てたんだから、怪我なんてしてないよ。それに“この中”なら絶対しないし。あんた達もしてないでしょ？」

確かに、と頷いた。どういうわけか、水中にいるような錯覚を起こすこの中だと疵一つ負わない。現に虚閃を受けても衝撃すらこなかった。

見た目よりもずっと大人びた態度。少なからずも好感を覚える。

夏梨の目が大虚を捕えた。

「あいつも……」

そう言つて構え直すと、吉良が慌てて止めた。

「大虚ならあの二人でやれる。それよりも君は休んだ方がいい！」

「だめだよ。あたしが休んだらまた見えなくなる」

大量に靈力を消費するようで、額から尋常でないほどの汗が吹き出す。立っているのもままならない様子に弓親は呆れた。

「一角達のことなら心配いらないよ。あいつらだって何も考えないで戦つてるわけじゃない」

「でも、」

「いいから任せなよ。これは本来死神の仕事なんだから」

そこまで言われたら引き下がるしかない。「分かったよ」と不満げに呟く夏梨を見て、ふつと微笑む。

夏梨が力を抜くと同時に蓮の花弁が散つていった。水中のような不思議な感覚も薄れていく。

大虚の姿も見えなくなっていく。

『夏梨、逃げて！』

唐突だった。

母の声が聞こえた瞬間、右腕の感触を失う。

「　　っあゝ」

喰われた……！！

右腕の失くなったところから勢いよく血が溢れた。

They biganto move for him.

「あ、あ、ああ、ああ、あ！」

激痛を越えた痛み。咄嗟に手で抑えると、やつぱりそこから先はな
くて。

真つ赤な血が悪戯に手を汚す。

大虚の口からはぐちゃぐちゃと生々しい音がする。

刀を取られた！

すぐに吉良が応急処置を始めた。淡い光が噛みちぎられた部分を包み込む。

夏梨は息を荒げて大虚を睨み据えた。

大虚は空間を割り、ぱっくりと開いた中へ姿を消していく。

「お母さん……お母さん!!」

頭の中に響いた声も聞こえない。姿も見えない。近くに感じた確かな存在も消えた。

「お母さんを返せ！ 返せよ！」

こんなにあんまりだ。せつかくまた会えたのに……！

そんな夏梨を嘲笑うように、大虚は一度振り返り完全に消えた。

それと伴い空間の歪みも閉じる。

この喪失感を味わうのは二度目だ。瞳が潤みそうになるのを必死に堪える。

泣いてはだめだ、と自分に言い聞かせる。あの時たくさん泣いたんだ。もう泣かないと誓ったんだ。

眉間にぐっと力を込め、唇をきつく噛み締める。その表情はどことなく一護に似ていた。

出血もおさまり、疵口を手で触れる。

（ない……）

腕がない。

「……すまねえ」

え、と顔を上げる。

「俺達のミスだ。詫びて収まるような問題じゃねえけど……」

「違う」

彼等のせいではない。自分の力不足が招いた結果だ。

「ただの自業自得だよ」

恋次は何とも言えない顔をした。こんな小さな子供からそんな言葉が出るとは思っていなかった。

怒るでもなく泣き喚くでもなく、一歩置いて達観した姿勢。

こんな奴が現世人でいるのかとつくづく感嘆した。

「謝んなきゃいけないのはあたしの方だよ。あたしのせいで怪我させちゃったし……」

「バーカ、こんな怪我のうちに入んねえよ」

「ま、このくらい十一番隊じゃ日常茶飯事だしね」

さも楽しげに口角を上げる一角と弓親につられて笑う。

立ち上がるうとした夏梨の首に背後から刀が宛てがわれた。

「無駄な抵抗はするな。我々は隠密機動部隊。貴様を捕縛する」

広い一室の中に白い羽織りを身につけた者達。総勢十人がその中を埋めていた。

醸し出す雰囲気はそれぞれ異なるが、威圧感はいずれも大抵ではない。

「これより隊主会を開く」

上座に立つ、長い髭を蓄えた老年の男が口火を切る。

山本元柳斎重國。一番隊隊長であり、護挺十三隊を統べる頭。

その歳にそぐわず、炎熱系最強の斬魄刀を持つ彼の右へ出る者はいない。

「もう既に知っておろうが、先刻、第八十地区流魂街“更木”周辺で巨大な霊圧が発生した」

淡々と紡ぐ言葉に耳を傾ける。

元柳斎が「碎蜂」と呼べば、小柄な少女が応じ合図を送る。巨大な扉が開き、全身黒づくめの男二人が子供を連れて入ってきた。

抵抗できないようにと残った片腕を後ろに回されているにも関わらず、深い色の瞳は力強い。

視線が一斉に集中する。

「おぬし、名は」

「夏梨。黒崎夏梨」

子供が、夏梨が答える。その場にいた者全員、息を呑んだ。

“黒崎”と言われて思い付く人物は一人。尸魂界を救い、世界を救った死神代行。

その者の姓を名乗るのだから反応せずにはいられない。

「はて……死神代行、黒崎一護の血縁者と見て宜しいか」

「……やっぱり、一兄のこと知ってたんだ。あたしは妹だよ」

ざわめきたった。そう言われれば、意志の強い目は似ている。

興味深く眺める者、実験台を見付けたかのように笑みを浮かべる者、獲物を狙うように目を光らせる者……

ずくりと背筋が疼く。

「おぬしは何故こちらへ参ったのだ」

「知らない。変な化け物に襲われて、気付いたらこっちにいた」

じれったそうに早口で言う。帰れるのなら早く帰りたい、というのが正直な気持ち。遊子に心配なんてかけたくなかった。

「ふむ……なんと奇怪な事よ。して、斬魄刀を所持していたと聞いた。正解も得ておると。ちと見せてはくれんか」

恐らく本題はこちらだったのだろう。纏う雰囲気が変わった。

口調は同じだが、眼光の鋭さが増す。

夏梨は乾いた唇を嘗め、ごくりと唾を飲み下した。

「あの刀ならないよ。腕と一緒に持って行かれちゃったから……」

無意識に手が疵口に向かう。腕がないのもショックだが、それ以上に“母”も喰われたと思うと心臓が捻り潰されるように辛い。

悔しさに唇を噛む。

元柳斎は静かな瞳を向けた。

「斬魄刀の名は」

「……蓮荷真咲」

「なるほど。では呼び掛けてみよ。斬魄刀はいわば魂の片割れ、切つても切れぬ存在。おぬしに霊圧がある限り呼べば応えるであろう」

それは“普通”なら。

“普通”ならそうだが、夏梨のは違う。“普通”ではない。

「あれはあたしの力じゃない！ 使ったのはあたしだけど、それはお母さんが力を貸してくれたから……！ さつきから呼んでも返ってこないし、あれだけ近くに感じたのに今は何も感じない。あたしの中にお母さんはもういないんだ！」

くしゃくしゃに顔を歪めて声を荒げる。しかし我に返ると気まずく顔を俯かせた。

「だから無理だよ」

震える拳に力を入れる。

悲しみか？

いや、違う。悔しさからだ。

夏梨は強くありたいと願った。兄のように強くなりたい。一護はもう力を失ってしまったけど、今まで散々護ってもらったのだから次は自分が兄を護りたい。

母は力をくれた。一護と同じ、死神の力。母の死後、その姿を幽霊として見ることもなかったので成仏したのだと思っていたが、何はともあれ、母は形を変えて自分の前に姿を現した。

原因なんて分からない。ただ逢えたこと、それに力を貸してくれた

ことが嬉しかった。

今は何も力のない子供と同じ。

母は自分を護って消えてしまった。

そんな自分に腹が立つ。

「面白い……非常に興味深いヨ！」

一人の男が喜々として声を上げる。

顔面黒塗りの姿は奇怪。

元柳斎はそれを嗜め、喉の奥で唸った。

「おぬしには悪かろうが、そのような前例は未だないのう」

「別にどっちでもいいんだけどさ、あたしはいつになったら帰れるの」

聡い子だ。その場にいる誰もがそう感じた。

黒崎一護の妹を名乗るとはいえ、まだ信じるには値しない。嘘をついているかもしれない。まあ、瞳を見ればそのような事はないと分

かるのだが、何せ尸魂界は一度酷い裏切りに遭っている。

「おぬしの身元とその大虚が確認されない限り帰すことは叶わぬ」

「大虚？」

「仮面の化け物のことじゃ」

「ああ、ふうん」

素っ気なく返し、ふと黙り込む。どうすれば早く帰れるか考えているのだろう。

「大虚はおいといて、あたしの身元なら浦原さんに聞けば分かるでしょ。あの人も死神なんでしょ？」

「な……！ 貴様、浦原を知っているのか！？」

すかさず食いついたのは碎蜂と名乗る少女。

全身の毛を逆立て威嚇するような勢いに、しかし夏梨はあっけらかんとしている。

「うん。お店に姉とよく行くし」

その途端、傘を被り女物の華やかな着物を羽織った男が反応した。

「お姉さんもいるのかい？」

意外そうな顔からして、大方一護の姉を想像したのだろう。

「あたしの双子の姉、ね」

似てないけど、と語尾に付け加える。

「姉は……遊子にあたしと違って心配性だから、なるべく早く帰りたいんだ。そのためなら何でも協力する」

その心配性の姉だが、口裏合わせた浦原と一護の言葉に、岩手にいったと聞く夏梨を羨ましがっていることなんて知らない。

いいなあ、と口ずさみながら岩手へ送る手紙を書いていることなんて知らない。

「よかるう。こちらとしても、おぬしの力を借りたいのづ」

「あ、ありがと！」

「こう簡単に許しが出るとは。」

夏梨は安堵の息をほっと吐き出した。

「現世からの報告だ。準備はほぼ完了、明日には行動に移せると」

夏梨が退出し、再び空気が引き締まる。

“六”と書かれた白い羽織りに、頭に“貴族の証”を身につけた男、朽木白哉が淡々と言った。

「うむ。ではこちらから人員を言い渡す。朽木白哉、阿散井恋次、日番谷冬四郎、更木剣八、斑目一角、朽木ルキア。この者等に現世へ向かってもらう。そして駒村左陣、涅マユリ、おぬし等はこれからすぐに黒崎夏梨と虚圏へ向かうのじゃ」

そこはドールハウスの中。作り物の可愛い中で、子豚の人形がトシン、トシンと動く。

「おつ、避けるの上手くなってきてんじゃないの」

その中をを覗いていた毒ヶ峰リルカは皮肉げに口を叩く。

「うるせえよ！！ 眺めてねえでヒントぐらいよこせよ！！」

それに向かってがなるのは有り得ないほどに身体が小さくなった一護。こうなったのも彼女の完現術のせいなのだが、それにしても子豚が巨大な大豚になったリーチの差につくづく嘆息する。

『ドールハウス』は、彼女が認めて“許可”を与えたモノを、好きなモノに自在に出し入れする能力。

その証拠に、一護の上着には可愛い“ハートのマーク”が着いている。

「ヒントお？」

リルカは思いきり顔をしかめた。

ありえない、といった表情。

「あたしら生まれた時から完現術を使えたのよ！ コツもヒントも知るわけないでしょ！」

バツカじゃないの！

そう煽れば、一護の額に血管が浮く。

これも一護の完現術を引き出すための修業の一貫なのだが、こんないい加減なのは初めてだった。

単にリルカの性格が反映しただけだが。

「待たんかいゴラアアア！」

豚の人形、通称“ブタ肉さん”に入れられたヤクザが怒鳴りながら一護を追いかける。

「ワシはおまえを十五分以内にブチ殺さんと、一生この変な縫いぐ

るみから出られへんようになんねんぞ！！　せやからブチ殺させる
やああああ！！」

「うおおおお！！？」

大きな腕で潰されまいと逃げる。

『完現術は愛の能力』

リルカの言葉を頭の中で反芻する。

完現術を扱えるようになるには、そういったモノが必要。

リルカのように惚れ込んでいなくてもいい。銀城のように身につけて愛着があるものでも構わない。

いつも持ち歩いているもの……

彼の目がズボンの後ろポケットへ向かう。

（代行証だ……！！）

死神の証だったソレ。一護の顔に笑みが浮かんだ。

時間です

機械的な音声が鳴る。

条件通り十五分以内の完現術の発現が認められなかった為、
猛獣モード”が発動します
“

『タイマー』が発動した。

They bigan to move for him・(後書き)

夏梨ちゃんと死神達との御対面です(^^)

夏梨ちゃんてなんであんなに可愛いんだろ
妹に欲しいくらい以下ry

前回の章題『flower』ですが、じつは二つの意味を掛けました！

一つは『花が咲く』

もう一つは『才能が開花する』

能力で蓮を咲かせたのは花言葉が『削除』だったのと、真咲さんのイメージから。

ようやく進んできたかな？

まだまだ続くのでよろしくお願いします(^^人^^)

I s i t G o d o r a m o n s t e r t h a t i s b o r n

カチ、カチと時計の針が音を刻む。

浦原は部屋の中央で胡座をかき、じつと時計を見ていた。

不意に立ち上がる。

「夜一サン、ご苦労様っス」

一枚返された畳。その下はぽっかりと穴が空いており、巨大な空間が存在する。

夜一は軽やかな動きで浦原の前に現れた。

その手には幾本かの縄。

「まったくじゃ。わしとて少々てこずったぞ」

「この……ッ、さつさと放しやがれ!!」

「なんでネルたつもなんすかあああ!」

「酷いでヤンス!!」

「鬼だ！ 鬼畜だ！！」

「うるさいのう。静かにすることもできんのか。こっちの奴は文句の一つも言わぬというのに」

「てめえが殴り倒したんだろうが！」

水葱色の髪の破面、グリムジョー・ジャガージャックは声を荒げる。目前にいる夜一を殺さんばかりの勢いだが、鬼道で動きを封じられたあげく、縄でぐるぐる巻きにされているため叶わない。

夜一は「はて、何のことかのう」と白を切り、白目を剥いて気絶したザエルアポロに繋がる縄をくいと引く。

「おい、はよ起きぬか」

ネル達は顔を青ざめ後ずさる。いきなりやって来て、捕まえられて連れて来られて、もう訳が分からない。

夜一の蹴りで無理矢理意識を覚醒させられたザエルアポロは憎々しげに悪態をついた。

時計の針の音が聞こえるくらい静かだったのに、騒がしいことこの上ない。

「はい、皆サンちゅうもーく」

パンパンと浦原が手を叩くと一斉に視線が集中した。

「誰だてめえ!!」

「アタシっスか？ アタシはただのしがない駄菓子屋っス」

「駄菓子ってなんすか？」

「きつとお菓子にもならないダメダメな食べ物に違いない!」

「普通のお菓子っスから」

「お菓子っすか!？」

「よだれ垂らすな汚ねえ!! ってどわっ!」

お菓子と聞いてぼたぼたと口からよだれを垂らすネルの頭を蹴り上げる。

それを見て逆上したドンドチャツカが頭に食らい付く。

混沌。

「あらー、話が進みませんねえ」

「喜助、のんびりしてられぬぞ。早くせんか」

「そうですね。では」

浦原は比較的落ち着いているザエルアポロに向き直る。

「アナタのことっスよね。石田サンがおっしゃっていたのは」

先日、虚圏から帰ってきた雨竜達からの報告。

それはやはり浦原が予想していた通りだった。

「藍染の実験体である虚はアナタが管理していたんスよね？」

「ああ、そうだね」

ザエルアポロは至って興味なさそうに答える。

浦原は尚も続けた。

「アナタが“生まれた”時の状況を教えてください」

白い、眼鏡の形をした仮面の名残。その奥の目がぎょろりと浦原を見る。

先程とは違い、口許に不敵な笑みを浮かべる。

「あの滅却師、そこまで喋ったのか。まあ良いけどね。話してやるよ」

それは一年前に遡る。

超人薬を投与された後。一人の死神によって心臓を刀で貫かれ、敗北した。

確かにそれは死んだ筈で。

だが彼は“保険”を掛けていた。もしも本体が死んだら、産み付けた卵が目覚めるように。

彼の従属官は、喰えばたちどころに傷が癒える薬代わりでもあった。それは一年前の戦いで実証済みだった。そしてその従属官の役割はもう一つ。

いざという時の“母体”になること。

ただしその場合、従属官に産み付けた卵は潜伏期間があるため、実戦で使うよりも成長速度が遅い。

「おかげで外に出られるまで半年以上かかってしまったよ」

話を聞いていた夜一は、うえつと顔をしかめた。

破面の能力は多種多様だが、これほどまでにグロテスクな能力なのか、と身震いする。

「気持ち悪い能力っスねえ」

「僕は完全なのさ。何度だって生き返る」

「……それで、その時実験体は……」

「なかったよ。絶対に見つからない場所に保管してあったんだけどね」

やれやれと溜め息をこぼす。

彼にとって貴重な実験材料がなくなったのは重大な問題だった。

全ては興味の対象。たとえ藍染の所有物であったとしても。

「アレはなかなか特異だったからね」

その言葉に浦原の目が鋭く光る。

「どのようにスか」

ザエルアポロは笑った。薄情な笑み。明らかに莫迦にした笑い。

「君達に理解できるわけがない。あれは理をも超える存在、特別なんだよ。アレを完成させたらどうなるんだろう。嗚呼、考えただけで鳥肌が立つね」

恍惚とした表情で語る。

理は絶対的、不変なもの。言葉で説明は出来ないし、それを超えるものがあつてはならない。

世界の均衡を保つための理が崩れれば、現世だけじゃない、尸魂界や地獄、虚圏にまで影響を及ぼす。

そんなものを藍染は研究していたのか、と改めて彼の恐ろしさを感じ知らされる。

「全ては終わつたらんということか」

だが、何故その実験体が夏梨を襲ったのだろうか。

「考えられるとしたら、夏梨サンの霊圧が急速に上がったことくらいですかねえ」

首を捻り眩く。

その時、店の外から声が掛かった。

「夏梨ちゃん！」

遊子は一人だった。暗い、暗い世界、上も下も分からない。

ただ、ゆらゆらと灯が燈つては消えていく。

これが夢の中だとは心得ている。だが、どうしようもなく不安が襲い。

遠くに、微かに夏梨の姿を見たのだ。

「夏梨ちゃんいないのー？」

声が訝する。

遊子はぶるっと身を震わせた。

「夏梨ちゃん、お兄ちゃん！」

ゆっくりと歩を進める。止まっていると不安で押し潰されそうだった。

歩調がだんだん速くなる。

「お父さん！」

虚無の世界。誰もいない。誰も応えない。

堪え切れなくなり遊子は叫んだ。

「お母さん！」

はっとして目が覚める。周りを見回せばいつもと同じ、変わらないリビング。

目尻に溜まった涙を拭う。

テーブルに突っ伏して眠ってしまったのだろう。そこには書きかけの手紙があった。

「あ！ 早く書かなきゃ！」

岩手にいるだろう夏梨を思っ

て。残りやささつと書き上げ、可愛い兎の模様の封筒に入れると、遊子は家を飛び出した。

「こんにちはー！ 浦原さんいますかー？」

向かった先は浦原商店。夏梨がいる住所なんて知らないの

で、浦原に送ってもらおうと考えたのだ。

「浦原さん！」

返事がない。首を傾げる。

店は開いているのでいないはずはないのに、と思いそろりと奥を覗く。

（なんだろ……？）

いつもと違う気がする

もう一度呼ぼうとした時、襖がからりと開いた。

「あらあ、遊子さんじゃないスカ。今日はどういったご用件で？」

「こんにちは。あの、これ夏梨ちゃんに届けてほしいんです！」

差し出された封筒を一瞥し受け取ると懷に仕舞った。

「分かりました。ではこちらで送っておきますね」

いつも通りの胡散臭い笑みを浮かべ、帰ろうとしない遊子に「他に何か」と尋ねる。

遊子は奥をじっと見ていた。

浦原の内心に焦りが生じる。

彼女は妹の夏梨よりも霊力がないと聞いていた。だから整の魂魄さ

えもぼんやりとしか見えないと。

ついこの間まではまさしくそうだった。

黒崎家には珍しい、霊圧の低い子供。

だがいま目の前に立っているのはどうだろうか。心なしか霊圧が高くなっている気がする。

「お客さんですか？」

いや、気ではない。確実に高くなっている。

「何故です？」

表情を崩さず、敢えて聞き返す。

遊子は「うーん……」と唸り、首を捻りながら言った。

「なんとなく、いる気がしたから！」

それは気配、つまりは霊圧を感じたということ。

浦原は目を丸くした。霊圧を感じるなんてありえないのだ。今、破

面の彼等は殺気石と同じ効力がある特製の縄で縛られている。

破面を現世に連れてきたなど言語道断、尸魂界に決して知られてはならないから。

だから、あるはずないのだ。

「じゃあまた！ ジン太君と雨ちゃんにもよろしく言うておいてください！」

子供らしい満面の笑顔でそう言い、帰っていく姿に浦原は鋭い視線を送る。

不可解。

あれだけ強い霊圧を放つ兄と妹に挟まれても上がることがなかった霊圧が、何故、一護の霊圧が消失してから、夏梨が消えてから急激に上がったのか。

強い霊圧に触発されたなら分かる。しかしそうではない。

あれこれと思考しながら部屋に戻ると、破面達を足で踏み付けおとなしくさせている夜一が声を掛けた。

「どうした、喜助。もしかや騒ぎ声が外に洩れておったのか？」

「いえ、声は全然洩れてなかったんすけどね」

歯切れの悪い返答に、夜一は眉間に皺を寄せる。

「なら何だと言っのじゃ」

「霊圧を感じたみたいっス」

「霊圧？ 誰のじゃ」

「この人達の」

しばし沈黙が流れる。嘘つけと笑い飛ばしたいところだが、彼がそういう嘘をつかないことは知っている。

それでも夜一は「ありえん……」と漏らす。

「……どこのどいつじゃ？」

「遊子さんですよ」

「一護の妹か……」

「一護……黒崎一護かあ！？」

その名前にグリムジョーが過敏に反応した。

一年前の戦いで負けたあげく情けまで掛けられたのだ。彼にとって忌ま忌ましい名前ではない。

「黒崎はどこだ!! 黒崎を出しやがれ!!」

「ネルたつも一護に会いたいっす!」

今すぐにでも戦闘を始めそうな勢いにネルも便乗する。

「はいはい、では今度会いに行きましょうねえ」

「なめてんのかてめえ!!」

「なめてませんで。ではアタシはこれから引きこもるので、アナタ方は勉強部屋で寛いでいてください」

へらへら笑い、問答無用に彼等を畳の穴へ落とした。

「てめえ殺す!!」と何やら物騒な言葉を受け流しつつ、畳を元に戻す。

「はたして、今日一日でどれだけ出来ますかねえ」

彼の手に握られた小瓶。その中に入っているのは夏梨を襲った大虚の霊圧。

これが、世界を救う鍵になるのか、はたまた滅亡させる脅威になるのか。誰もまだ知らない。

天空を仰ぎ見てもあるのは暗い空。太陽も月もない。

白い砂は、きつとかつて虚を形成していたものだろう。

夜の世界。

そこに白い蛹のような繭のような。

ピシリ、ピシリと真つ白な殻に輝が入る。

はらはらと崩れた殻は砂地と同化して。

一つ、産声が上がった。

凶悪で、神聖な

「嗚呼……」

早く行かなければ。

愛しい我が子が待つもとへ。

運命は歩き出した。もう後へ戻ることは出来ない。

ならば一步を踏み出せ。

畏れてはいけない。

恐怖を捨てろ、前を見ろ。

進め。決して立ち止まるな。

退けば老いる。臆せば死ぬ。

ただ、その名を叫べばいい。

I s i t G o d o r a m o n s t e r t h a t i s b o r n

ザエルアポロ……

彼は本当に苦手です。

ネムに卵を産み付けるところではガチでチキン肌になりました……

勝手な設定盛り込んだじゃったけどいいよね！問題ない！

そしてお久しぶりな遊子ちゃん。

口調とか分かんなさ過ぎて大変でした。

伏線（？）的なのを張ってきているんですが、分かるかなあ？

ていうか伏線になってるのかなあ？

読み終わった後、「そういう意味だったのか！」てなるような話に
したいです（＾　＾）

ハードル高いけど。

どうしたの？ また怖い夢でも見たの？

おいで、一護。

大丈夫よ。お母さんがいれば怖くないから。

お母さんと一緒なら安心でしょう？

ほら大丈夫だから。

怖い夢なんて飛んでいけ！

これでもう怖い夢は見ないわ。

安心して寝なさい。

でもお母さんから離れちゃダメよ？

白いお化けが食べに来ちゃうからね。

C o n t a c t : w h a t w i l l s h e k n o w ?

「斬月の……鍰……!？」

代行証から洩れる黒々とした気は、かつての彼の斬魄刀『斬月』の鍰を形作る。

それは彼の誇り。忘れられない記憶。

「これが一護の完現術……」

ようやくだ。ようやく、力を取り戻すことが出来る……

一護は『タイマー』によって化け物と化した人形を見据えた。

殴り掛かってくるこん棒のような腕を、その鍰で弾く。

斬れてはいない。効能は斬月の鍰と同じ。代行証を手から放しても使えなくなる。

(どうする?)

頭の中は意外にも冷静だった。

感じるのだ。身体が、感覚が取り戻していくのを。

『戦い』の本能。

ドクン。

一瞬だけ、代行証が脈打ったような気がした。

この感覚は知っている。

身体の芯が熱くなる。懐かしい、相棒の……

一護は地を蹴った。化け物が大振りに腕を振り回している隙を狙って懐に入り込む。

「バカ！ そんな懐に入ったら」

リルカが止めるが構わず腕で一線を描く。

月牙天衝。

卍は回転しながら円を描き、代行証から放たれる。

それは勢いに乗って化け物に衝突した。

「……や……」

「やった……」

一護は代行証を見詰める。

取り戻せるかもしれない。またみんなを護れるかもしれない。

胸の内から何かが沸き上がるのを感じ、それを強く握りしめた。

光が射した。

織姫は家路を一人で歩いていた。学校からの帰り道。マンションの階段を軽やかに上がる。

今日、一護は学校に来ていなかった。茶渡もだ。

（修業を始めるって言ってたしなあ）

今夜にでも顔を出してみようかな、と鼻歌まじりに考える。

「えーっと、鍵鍵ー……」

一人暮らしの寂れたマンション。家族なんていないも同然の織姫に、叔母から送られてくるお金で毎日やり繰りしている。

彼女の兄は随分前に死んだ。交通事故だった。

虐待を受ける毎日、そこから一緒に逃げ出したのが兄の昊。兄というよりは親のような存在だった。

交通事故に遭った日の朝、初めて二人は喧嘩した。とても些細なこと。誕生日プレゼントに兄から贈られたヘアピンが何故か気に入らなかった。たったそれだけ。

謝りたい時に、既にその人はいなかった。

小さな身体で大きな兄を背負い、小さな自宅営業の病院に向かったが、助からなかった。

そのヘアピンはブレザーの襟にいつも着けている。大事な、大切なものだから。

「井上織姫だね……？」

突然、背後から名前を呼ばれた。驚き振り返ると、黒髪で線の細い男が手摺りに腰掛けていた。

いつの間に、と目を見開く。

「あなたは……」

聞かなくても何となく分かってはいた。

恐らくこの男が

「月島秀九郎」

一護を狙い、雨竜を斬った本人。

ヘアピンが着いている襟もとに手が向かう。

月島はボタンと本を閉じた。手摺りから下りて織姫に向き直る。

「安心しなよ。君を襲ったりはしない」

そう言いながら本から栞を抜く。チカチカと光を放った後、それは刀に変わっていた。

「完現術……」

何が“襲ったりはしない”だ、戦う気満々ではないか。

「もう銀城と会ったのか。行動だけは速いな」

「あなたが石田君を斬ったんですね」

ここで捕まえないければ、一護が狙われる。

逃がすわけにはいかない。

「なら、何だっと言うんだい？」

「あなたを捕縛します」

両手を前に翳し、言霊を唱える。

兄から貰ったヘアピンは姿を変える。

「『三天結盾』！」

言った直後、月島を見失った。

背後から、生々しく刀で斬られる感触。

肩から斬り込まれ、胸まで押し進められる確かな感触。

「…………え…………」

「なあなあ、あたし一人で走れるから降ろしてよ」

「……………」

「なあつてばー！」

「ぬ…………耳を引っ張るでない」

「まったく喧しい小娘だネ」

黒腔ガルガンダの中、狛村に背負われている夏梨は彼の犬耳をぐいぐい引っ張る。

それを見て、涅は平常の顔で悪態を吐いている。

「黒腔は霊子を足場にしなければならぬ。貴公には無理であろう」

そう言われると口をつぐむ。ふて腐れたように舌打ちをした。

「まあいいや。狛村さんの耳触れるし」

手を伸ばし、ぽんぽんと頭を軽く叩くと耳がひくひく動いた。

この娘は、この姿をどうも思わないのだろうか。純粋な疑問を投げ掛けると、夏梨は「なんで？」と首を傾げた。

「びっくりはしたけど、なんかカッコイイじゃん。癒し系だし、あたし犬好きだし」

「……そうか」

（狼なのだが……）

粕村は微妙な面持ちで頷いた。しかし、そういうところはやはり兄と似ているなと感じる。

あの死神代行とそっくりだ。表裏のない性格にほんわかと和む。

だが、夏梨の「どこまでが犬なの？」という質問に思わず唸った。

「くだらない話はやめたまえヨ。それより私の実験体になる気はな
いかネ」

「やだよ」

「涅、いい加減にせぬか」

「何故だネ？ 今ならVIP待遇してやるというのに」

「目がイッてる人に着いて行きたくないし」

「失礼極まりない奴だネ。私の言うことを聞きたまえヨ」

そんなやり取りを後ろで聞いている者が一人。

（ひいひい！ こんな空気いたたまれない！）

「おーい、花太郎。ついて来てるか？」

「は、はい！」

山田花太郎。四番隊の席官。黒髪に眠そうな大きな垂れ目。

夏梨に呼ばれ大袈裟にびくつく。

何故、こんな事になったのだと思い嘆く。

（卯ノ花隊長おお！！）

事の始まりは二時間ほど前。

四番隊隊長、卯ノ花烈が隊主会から戻ってきた時、傍らにこの見知らぬ子供がいた。

『卯ノ花隊長……そちらは……』

死覇装でも、ましてや流魂街で見る着物でもない。

流石に副隊長の虎徹勇音も目を丸くした。

『黒崎さんの妹御だそうですね』

『一護さんの！？』

花太郎が驚いているのをよそに、卯ノ花は彼女の疵を癒す。

夏梨は不思議そうに眺めていたが、ふと花太郎の方へ向いた。

『黒崎夏梨。よろしく』

『ぼ、僕は山田花太郎といいます。よろしく願いします』

『単純すぎて覚えにくい』

意志の強い瞳はそっくりだった。ついでに反応も。

花太郎は以前、旅禍として侵入した一護を助けたことがある。治療は腕が立つが戦闘においては全く駄目な彼にとって一護は憧れにも近い存在。

そんな彼の妹と聞いたら、気になるしかないじゃないか。

そわそわと落ち着きなく夏梨を見ている花太郎の様子に、卯ノ花は聖母のように微笑む。

『お二人は何だか似てますね』

黒髪のところとか。

いち早く反論したのは夏梨だった。

『あたし、こんなへたった顔してないよ』

『え、えー!?!?』

何だか一護自身に言われたような気がして落ち込む。

そんな彼に、卯ノ花は更にとどめを刺した。

『そうそう、山田七席、あなたにはこの子と一緒に虚圏へ行っても
らいますね』

『え!?!? なぜ虚圏に!?!?』

『いろいろと事情がありまして。でも夏梨さんはまだ治療が必要なの
ですよ』

『で、でも』

『行ってくださいますね?』

『は、はい!?!?』

花太郎は溜め息をつく。

こんな自分が役に立てるのかとも思ったが、出来れば行く前に人選を教えてほしかった。

粕村はまだしも、涅は気味が悪くて仕方ない。

いや、まだ十一番隊がいなくて助かったのだが。

「花太郎、大丈夫か？」

「だ、大丈夫です！ 僕のことはお気になさらず！」

これ以上心配されたら立ち直れないよ……

ちらりと粕村の背にいる夏梨を見遣る。

まだ小さい子供なのに、片腕がないにも関わらずどうしてあんなにも堂々としていられるのだろう。

やるせない気持ちに溜め息を吐いた。

「どうだ、何か感じるか」

「……微妙」

巨大な建物の残骸を足で蹴りながら首を傾げる。

頼りない返事ではあるが、足はしっかりと一つの方角へ向かっていた。

狛村は絶えず耳を動かし周りに気を配っている。

花太郎も辺りをきょろきょろと見回していた。

「うわあー!!」

突然、夏梨が声を上げた。

急いで向かうが姿が見えない。

「みんな足元気をつけて！ 穴が空いてる！」

下を見ると、なるほど、確かに穴が空いていた。外からこじ開けたような穴。

中を覗くと夏梨が眉間に皺を寄せ見上げている。

「夏梨さん、大丈夫ですか!？」

けっこんな高さがある。足をくじいては大変だと声を掛けるが、意外にも怪我はないようだった。

兄ににて頑丈なのか、けろりとしている。

「向こうに何かあるから、あたし見てくる」

夏梨はとんでもない事を言い置き、狛村と花太郎が止める間もなく元気に走って行ってしまった。

虚に襲われたらどうするのだ、と吠えるも後の祭り。

「儂等も行くぞ!」

「は、はい!」

夏梨を追って狛村、花太郎も穴に飛び込む。

「まったく面倒な連中だヨ。私はこっちを見に行こうかね」

涅槃は一人、どこぞへか姿を消した。

穴の中はそこそこ広かった。ただ明かりが侘しく、薄暗い。

何に使うか見当も出来ない不思議な機器。その合間を縫って進むと夏梨の背中を見つけた。

一つの巨大な硝子の容器。その隣に紙が乱雑に散らばっている。

「これはいい……」

良からぬ事をしていたのは見て分かる。

藍染か。

粕村は憎々しげに唸った。

「夏梨さん……？ どうしました……？」

一枚の紙を凝視したまま動かない。

花太郎が声を掛けると、夏梨の肩が小さく震えた。

「……なんで、ここにヒゲや一兄の名前があんだよ……！」

グシャッと紙を潰す。

「なんで……これじゃあ……」

彼等が、実験体のようだ。

ここで何を研究していたんだ？

何のために、なぜ一護達の名前がある？

この容器の中にいた奴は、どこに行ったんだ？

「くそっ……」

怒りで瞳を滾らせる。

「二人とも、こちらへ来てくれぬか」

奥の方へ行つた狛村に呼ばれ、二人がそちらへ行くと巨大な穴があった。

先は見えず、ひんやりと冷たい空気が漂っている。

「儂が先に行く。貴公等は後ろについて来い」

狛村が入っていく。その後ろを夏梨、花太郎と続く。

壁を破壊して作られた洞窟はつい最近できたらしい。

そこにあの大虚の霊圧を感じた。

「上へ抜けるぞ」

1キロほど歩いただろうか。長い洞窟は終わり、また暗い空を拝む。

地面を見ると、何かを引きずったような跡が見受けられた。

後ろを見る。さっきまでいた虚夜宮。

「……儂から離れるでないぞ」

引きずった跡はすぐに途絶えた。そこには何もなかったが、一つだけ、巨大な霊圧の名残があった。

それは以前戦った破面達の比ではない。

「急いで戻るぞ！　もしやとんでもない化け物が生まれたやもしれぬ！」

夏梨はその場所をじっと見詰めていた。

「夏梨さん！？　早く行きましょう！」

「……うん」

C o n t a c t : w h a t w i l l s h e k n o w ? (後書き)

狛村さんは癒しです。

耳をびくびくさせたり可愛すぎです。

射場さんも出したかったけど、口調が分からんし挫折。

それと、花太郎も好きなんだけど、うちが書くと可愛くないですね
(笑)

今回はとにかく人選が謎。出来たら十一番隊とマユリさんと花太郎で、花太郎涙目にしたかったんですけど話が進まなそうなので狛村さんにしました。

そろそろ日番谷や乱菊さんも出したいです(´・`・´)

Until that time comes . . .

夏梨達は穴を引き返し戻ってくると、どこぞへか姿を消していた涅槃がうつっていた。

「ふむ。ここはどうやら研究所と繋がっていたようだネ」

その辺のものを漁りながらぶつぶつと呟く様子は不気味。

花太郎は顔を引き攣らせた。

「涅槃、急いで涅槃挺へ戻るぞ」

「何故だネ。私はまだ十分調べておらんヨ」

まるで子供が駄々をこねるようだ。少しも可愛くはないが。

「いい加減にせぬか。早急に手を打たねばならんのかもしれんのだぞ」

「だから何だと言っのだネ？ 私に指図するのはやめたまえヨ」

ああ言えばこう言う。終わりの見えない押し問答に、花太郎はただおろおろと右往左往するばかり。

夏梨は黙ってその様子を見ていたが、ふと視界の隅に一冊の古びた本を見つけた。和綴じにされたその本はぼろぼろに汚れ、紙も黄ばんでいる。

それを取り上げるとパラパラとめくる。

筆で書かれたのか、昔の字体に首を捻る。

「ねえ、この本なに？」

二人に本を突き出して見せると涅は鼻で笑った。

「そんなのも知らないのかネ！ まったく、最近の餓鬼は無知で困るヨー！」

「涅、少し黙らぬか。それは所謂神話のようなものだ」

「神話？」

「ああ。確かこの世の理について書いてあったように思うが」

夏梨の手から取り上げ、さっと目を通す。

「『是、則ち理也』」

「なに？」

「目に見えぬ力のことだ」

それは不変の摂理、人間が神と呼ぶもの。

右手は水極、則ち陰にして身。左手は火足、則ち陽にして靈

手を合わせることに、それはつまり陰陽の調和、太陽と月の交錯、靈と肉体の一体化であり、火と水が交えば火水^{かみ}となる。

それが理であり神なのだ。

「……なんか難しいこと言ってるね」

「つまりは合掌……祈念せよ、さすれば叶わんと、そういう意味である」

ボタンと本を閉じ夏梨に返す。

夏梨はじつとそれを見詰めた後、不意に顔を上げた。

「続きはないの？」

「あるにはある。だがその話は後だ」

狛村の耳がひくひくと動く。言葉にしくなくても、その場にいる全員が感じ取れた。

虚夜宮に向かってくる無数の霊圧。雑魚のようなものからアジューカス級のものまで。

違言はないな、と睨みを利かせると涅は不機嫌に見返したが、最終的には従った。

虚に襲撃されては、満足に調べ物も出来ないと践んだのだろう。

行き同様、狛村に背負われ暗い空間を走る。

どろどろした空気に顔をしかめつつ、夏梨は狛村に話し掛けた。

「ねえ、さっきの続き教えてよ」

「うむ……儂もさだかではないが。確か続きは」

「『最後の審判』だヨ」

狛村の言葉を奪い、ぎょろりと瞳を夏梨に向ける。

「『最後の審判』？」

その言葉を口に出すと、何故だか知らないがぞわりと肌が粟立った。全身が拒否しているようだ。

鳥肌が立った腕を摩りながらその先を待つ。

たが涅はその先を言わなかった。無言のまま霊子で足場を固める。

何が何だか。花太郎に視線を向けても困ったように肩を竦めるだけ。

「ねえ、『最後の審判』になるとどうなるんだよ」

「何もない」

声は、はつきりと響いた。涅は口角を上げ、今まで無感情に聞こえた声も楽しげに弾む。

「まさに『無』なのだヨ。それが『始まり』なのか『終末』なのか、それすら分からない。ただ無に還る」

世界の終わり。相反するもの同士が交じり、解け合い、一つになれば何もなくなる。

一から一を引いて零になるのと同じ。

「ただか神話だがネ……」

そんな涅の言葉も、夏梨の耳には入ってこなかった。

黒腔から抜け出た時には、既に空は暗くなっていた。天高く三日月が笑っている。

狛村、涅の二人はそのまま姿を消し、夏梨は花太郎に連れられ再び四番隊隊舎へ赴いた。

「ご苦労様です」

そう微笑んで迎え入れてくれる姿に小さく息を吐く。卯ノ花を見ると母と重ねてしまう。似ているわけではないが、“母”というのはまさしくこの人のことなのだろう、と妙に納得してしまうのだ。

卯ノ花は診断をしていた。黒髪の、肩より上で切り揃えられた頭は後ろから見ると少年にも少女にも見えなくはない。だが華奢な体格から、やはり少女なのだろう。

ふと、その少女が振り返る。

目が合った瞬間、少女は大きく目を見開いた。

「……夏梨か……!？」

「ルキアちゃんだ。どうしたの？ 怪我？」

飄々とした夏梨に、朽木ルキアは勢いよく卯ノ花に振り返り、ぱくぱくと口を開閉する。混乱しているようで、口から出てくる言葉は吃っている。

卯ノ花は微笑むばかりで何も言わない。ルキアの視線がぎこちなく夏梨に戻り、その腕を見た。

ヒュッと喉が鳴る。

「夏梨……っ、その腕はいつたいどうしたのだ！」

駆け寄った彼女が触れるのは先がなくなり包帯で巻かれた腕。先程とは違った顔の陰しさ。

ルキアは現世にいた時、黒崎家に居候していた。もちろん義骸に入り誰にでも見える姿でだったが、その時とは異なる口調に瞠目する。

「何故そなたが此処にいるのだ！ 一護は知っておるのか！？ いったい何があつた！」

「ちょ、ちよつと待つてよ！」

矢継ぎ早に、ただならぬ気迫で迫られ夏梨は声を上げた。

ようやくルキアは口を閉じるが、眉間には皺を寄せたまま。

「あたしも全然分らないんだ。一兄はたぶん知らないし、浦原さんもあたしがここにいることは知らないと思うよ。腕はちよつと…食べられちゃっただけ」

ふう、と息をつく。自分でも今の状況がよく分かっていないのだ。これ以上説明のしようがない。

ちらりとルキアを盗み見る。ルキアは顔を臥せ、細い身体を震わせていた。

「ルキアちゃん……？」

恐る恐る声を掛ける。何かまずい事でも言っただろうか、と思い悩んでいると、ルキアはキッと顔を上げた。

「莫迦者！！」

コン、と頭に小さく衝撃が走る。

「食われたただだと！？ 腕一本、安いとも思っておるのか！？
まだ年端もいかぬ女子が何を言っておる！ 一護がどんな顔を
するくらい、分かっておろう！？」

拳を喰らった頭を抑え、驚き見張るが、すぐに気まずそうに目を反らした。

嗚呼、

「本当に、そなた達兄弟は……」

無茶をする。

ルキアはそつと頭を撫でる。自分よりも小さい身体。それでもやはり流れる血は一護と同じ。

夏梨は思わず俯く。ルキアの怒りも尤もだと分かっていた。

「……ごめん」

小さく、小さく呟いた。

その時。

「おう、ルキア。帰ってきたらしいな」

がらりと戸が開き、現れたのは赤い頭。

恋次は入ってくるなり、どっかりと椅子に座る。

「赤髪のおっさんじゃん」

「誰がおっさんだ」

夏梨の相変わらぬの呼称にぎろりと睨みを利かせる。

「それより、おまえ何で医務室なんかにいるんだ？」

怪訝な顔をする恋次にルキアも首を傾げた。

「いや、現世で虚に襲われてな。その時、背中を斬られた気がしたから診てもらったのだが何ともなかった」

「どんな勘違いだよ。ダセえ」

「夏梨、こやつのは刺青眉毛と呼んで構わぬ」

「分かった」

「くだらねえこと教えんじゃねえよ!!」

勢いよく立ち上がり、椅子が転倒する。

そのまま喧嘩でも始めそうな空気の中、卯ノ花が「阿散井さん」と笑顔で呼べば、途端に静かになり椅子をもとに戻し座り直る。

「……で、おまえ夏梨ていつのか」

「うん」

「しかし夏梨、そなた背が伸びたか？」

「そりゃ一年もすれば伸びるよ」

「おい、ちょっと待て!!」

和気藹々と話し始めた二人に恋次は歯止めを掛ける。

「おまえらいつ知り合っただんだ!？」

その口ぶりはまるで旧知の仲のような。

しかし幼なじみである恋次はルキアから夏梨の名を聞いたことはないし、会っているのを見たこともない。

「一年前、家に居候させてもらっただけ」

「おまえが居候した家って一護のところだろ？」

「そうだが？」

はあ!？ と、恋次は頭を捻る。その様子を楽しむルキアは悪戯な笑みを浮かべた。

「恋次、夏梨は一護の妹だ」

「い、」

「妹おおおお!?!？」

そう叫んだのは恋次ではなく、廊下で話を聞いていた一角。弓親も隣にいたが、こちらはある程度予想はしていたようだ。

それでも驚いてはいるが。

「妹ですって!？」

またあらぬ方向から叫び声が聞こえたと思えば、窓が勢いよく開かれる。

そこから顔を覗かせたのは、艶やかなブロンドの髪に丰满な胸を携えた松本乱菊。

窓から侵入した乱菊は迷わず夏梨を抱きしめた。

「きゃあああ!! もうなにこの子、小さいし可愛い!!」

豊かな胸に顔を押し付けられ、窒息しそうになる彼女の傍らで一角は目をぎらつかせている。

「おい夏梨といったか!? 今すぐ一護を呼べ! 久しぶりに勝負だ!!」

「ちょっと何言ってるの！？　これから宴会に決まってるじゃない！」

「一角さんも乱菊さんも静かにしてください！」

騒ぎ始めた二人を必死に落ち着かせようと試みるが、それだけで静かになるはずもなく。

逆にヒートアップしたところへもう一人の訪問者が。

「松本おおおお！！！」

「た、隊長お！」

銀色の短髪に、翡翠の瞳を滾らせた少年。白い羽織りを着た姿は隊主会で見たばかりだ。

日番谷冬獅郎は夏梨とほとんど同じ身長にも関わらず、威圧感を放ちながら乱菊を睨み付ける。

「松本お……おまえ、仕事はどうした」

「え、えつとお、ちょっと休憩しようと思ひまして……」

「……二時間」

「え？」

「おまえが消えてから二時間だ！ 減給すんぞー！」

日番谷の激昂が飛んだ時、卯ノ花は静かに立ち上がった。

たったそれだけ。たったそれだけでその場は静まり返る。

「やはり若い子達は元気ですね」

微笑みを讃えているのに、この黒々とした雰囲気は何だろうか。

「しかし子供というのは外で遊ぶのが定石では？」

ぴしり、と空気が死んだ。

明かりが燈つては消え、消えては燈つて。

それ以上の変化はない世界で、遊子は目を開く。

（またこの夢……）

流石に二度目となると落ち着きもある。冷静に辺りを見回す。

近くで灯が燈った時、自分が立っているのが水面だということに気付いた。

しゃがみ込み中を覗く。だが灯は呆気なく消えてしまった。火花を散らして消えていく様は花のようにも見える。

まるで小さな花火だ。

ふと、その一つに触れてみた。

そんなことすれば熱いに決まっている。そう思ったが、何故かどうしても触ってみたくて。

まったく熱くはなかった。

温もりを持ったそれは遊子の手が触れるといっそう輝きを増す。

それが合図だったのだろうか。今まで一つ燈つては消えの繰り返しだったのが、まるで機が熟したように、辺り一面に数え切れないほどの灯が燈った。

「わあ……！」

キラキラとまばゆいばかりに光を放つ灯。足場になっている水面に映り、幻想的な世界が広がる。

下を見て、ああそうだ、と納得した。

前に夏梨を見たのは、この水の中だった、と。

遊子は灯の一つを掌に乗せた。そこで初めて気付いた。

灯ではなかった。

それは金に光る紅の蓮華だった。

Until that time comes . . . (後書き)

年明けまでに完結させたいけど出来る気がしない……

今回は少し宗教的な要素を入れました。

『最後の審判』とか。

でも本当の(?) 『最後の審判』は世の終末に人類が裁かれることです。

キリストが再臨して千年王国の後、死人が復活し、善人は永遠の祝福に、悪人は永遠の刑罰に定められるという…… (広辞苑より)

でも死神だし、独自の設定にしました。

仏教的な意味合いで蓮も盛り込んでるし。

次は現世中心になるかもです。

自分的に一護の修業はあまり話に入れたくないのですが、そうすると一護のほうが発展開になるので少し入れます。

こんなでも感想を頂ければ幸いです(^^)

C o n t a c t : w h a t i s h i s a i m ?

一日目の修業で完現術を発現させた一護は、翌日学校へ行った。案の定、無断欠席したことで担任の越智と竜貴にシバかれた。

その日も特に変わりはなく、夏梨の手掛かりも掴めないまま一日が過ぎていく。

「あ、そうだ。一護、あんたのバイト先の店長、昨日来てたよ」

帰りのホームルームが終わり、鞆に教科書を詰めていた竜貴が思い出したように言った。

「今日も来るって」

え、と声を漏らしたその時、教室のドアが勢いよく開いた。まだ教室に残っていた生徒の目が一斉にそちらへ向く。

そこには女が立っていた。帽子を被り、その下から力強い瞳が覗く。

「一護、てめえ何日バイトさぼってたんだ！」

「げ、店長……」

女、もとい鰻屋育美は多数の視線を気にせず、ずかずかと一護に歩み寄る。

「いい加減来いや！ 仕事がたくさん溜まってんだよ！」

言うや否や、一護の顔を鷲掴みにし引き倒すと、どこからか出したガムテープでぐるぐる巻きにし、そのまま担いで颯爽と教室を出ていった。

鮮やかな犯行に、誰も何も言えず、しばらく呆気にと取られていた。

一方、拉致されたように連れていかれた一護は、始めは担がれていたが今は引きずられるようにして歩かされていた。

「やっぱり高校生男児を担ぐのは無理か……」

ゼーゼーと息を切らしながら言葉は途切れ途切れになっている。

見栄を張るくらいなら始めからそうしろと愚痴をこぼすと、育美は酷い形相で睨み付けた。

「うつさいわね！　こちとら子持ちの主婦なんだ、全盛期はとうに過ぎてんだよ！」

「じゃあ今は更年期か？」

問答無用、投げ飛ばされる。これで全盛期ではないと言ったら、その頃はいつたいどれほどのじゃじゃ馬だったのだろうか。

校門の前に止まっていたワゴンに乘せられる。

「育美さん、ちょっと待ってくれ！　バイトは当分休みたいんだ！」

「ああ！？　ふざけんな、先週も休んでたじゃねえか！」

パンパンと手を叩き運転席に乗り込む。エンジンをかける。このまま店まで連れていく気なのだろう。

冗談じゃない。今日も修業をつけてもらうつもりだし、夏梨のことで浦原商店へ行こうと考えていた。

「無断欠勤したのは悪かったよ！　でもどうしても外せねえんだ」

出来るだけ早く完現術を完成させたい。今のままでは力としても弱い。早く完璧に熟せるようにならなくてはいけない。

夏梨の身体も心配だ。いくら死んでないと言っても、その抜け殻の状態で時間が経っている。魂魄が戻っても身体が衰弱しては元も子もない。

「……妹が、行方不明なんだ」

正確に言えば魂魄がなのだが、この際さして問題ない。

育美は進行しかけた車のブレーキを掛け、上半身を後ろに向いた。

「それ、いつの話？」

「……一昨日から」

ぶっさらばずに言葉を吐く一護をじつと見詰めると、額を手で覆い深く溜め息をついた。

「あんだねえ、そういう事は早く言えよ。あたしだってそんな時に仕事を押し付けるほど莫迦じゃないんだ」

「育美さん……」

「あたしの方でも聞き込みしてみる。こう見えて顔は広いからな」

にやりと口角を上げ、身を乗り出して一護の頭を叩く。

「無理すんな。子供は遠慮なく大人に頼れ！」

「……すまねえ」

その後、育美に自宅まで送ってもらった。始めは首を横に振っていたが、「黙れ！」と一喝され、結局家まで。ワゴンが見えなくなる
とそのまま銀城達がいるマンションまで走る。

その途中、ちょうど買い物から帰ってきた遊子とすれ違った。

「お兄ちゃん！ どこ行くの？」

「蝶原の方まで！ 帰りは遅えから、さっさと寝ろよ！？」

早口で伝え、すぐに背を向ける。

「お兄ちゃん……！」

だから気付かなかった。遊子が一瞬だけ、泣きそつに顔を歪めたことに。

マンションの扉を乱暴に開けると、一護と織姫、ジャッキー以外みんな集合していた。

テーブルの上にある水槽を見る。

恐らく、今回の修業場。

「……始めてくれ」

「ええ。『あんたを許可する』わ」

ちかちかと光り、水槽の中へ吸い込まれていく感覚。

足に地が着いたと思えば、足首までが水に浸っていた。面を上げると目の前に悠然と立つ姿。

一護は代行証を握り、完現術を出す。

「じゃあ、始めようか」

ジャッキー・トリスタンは笑った。

一護が修業を開始したのを確認し、茶渡は銀城に歩み寄った。

「少し聞きたいことがある」

茶渡は織姫から聞いたことを話した。

月島に接触し、斬られたこと。だが疵すら見当たらなかったこと。

『何でかな……あたし、月島さんのこと知ってた気がするの』

不可解な言動。

銀城は眉をひそめた。

「月島を知りたい。あんな達のリーダーだったんだ、知ってるだろ？」

嫌な予感がするのだ。雨竜に続いて織姫。だが雨竜が疵を負ったのに対し織姫は無傷。

「月島の完現術に記憶障害や暗示があるんじゃないか？」

織姫が月島を知っていることはないはずだ。仮に互いが知り合いだとしても、それならば月島が織姫を斬る必要なんてない。

銀城は目を臥せる。

「月島の完現術の名は『ブック・オブ・ジ・エンド』。何でも斬れる刀だが、そんな能力はない」

「……能力が変化したとは？」

「考えられねえ。成長はしても変化はしない」

なら織姫を斬ったのは誰なのだろうか。

能力は変化しない。月島の完現術は極端によく斬れる刀。しかし織姫の記憶に誤差が生じている。

考えられるとするなら、織姫を斬ったのは月島ではないか、銀城達が知っている人物が月島ではないかの二つ。

「石田雨竜にも確かめよう。もし井上と同じように記憶障害が起きていたなら、月島ではない第三勢力と考えた方がいい」

「それはどうか……」

扉の外からだった。静かな声が聞こえたと同時に、扉に亀裂が入る。縦に斬られ、暗い室内に明かりが差し込む。その光を背に立った細身の男。

「月島……！」

「やあ、久しぶりだね」

口許に笑みを浮かべてはいるが、何も映さない漆黒の瞳は無感情。額から汗が落ちる。

まずい、

銀城は唇を噛み締めた。

ここで月島と一護を接触させてはいけない。まだ早過ぎるのだ。一護の性格から、二人が顔を合わせたら必ず戦いになる。しかし今の彼では月島には勝てない。

「ジャッキーとリル力はどこだい？」

月島の目が水槽に向けられる。そこか、と刀を持った腕を振り上げた。

「　　つやめろ！！」

止めなければと完現術を出すが一歩遅く、水槽が真っ二つに割れる。ドン、と異常な空気が部屋を覆った。黒い気が溢れ出る。

『容れもの』を斬ったことでリル力の完現術が解け、一護が姿を現わした。

わずか三十分も経っていないにも関わらず、一護の姿は変わっていた。

死神を思わせる黒い袴。それらはすべて代行証から溢れる黒い気で出来ているようで、代行証を持った右腕は完全に覆われている。

ああ、と茶渡は声を漏らした。

一護の卍解も完現術も、『纏う』能力だったのだ。力を纏った姿こそが本来の能力を発揮した姿。

一年前、藍染との戦いに終止符を打ち、一護自身の霊圧を消失させ

た最後の月牙天衝『無月』などはまさにそれだ。

「あんたが月島か」

一護の声で我に返り、すかさず臨戦体勢をとる。

月島は刀を構えるそぶりも見せないが、全身から殺気が漏れている。

「おまえら退いてろ！！」

銀城は叫ぶのと同時に月島へ斬り掛かった。

巨大な大剣と細い刀身の刀、それに体格からも銀城の方が有利に思えたが、月島はたやすく彼の攻撃を受け流している。

薄く笑う姿に舌打ちをする。

茶渡は右腕を変化させ飛び掛かった。

轟く破壊音、壁をぶち抜き埃が舞う。

隣接した建物の屋上に月島は軽やかに着地していた。それを茶渡、銀城、一護が追う。

「石田を斬ったのはあんただよな？」

刀のように変わった右腕を身体の前に出し問い詰める。

月島は笑ったまま何も言わない。

「大虚に俺の妹を襲わせたのも、あんたなんじゃねえのか？」

一つ、疑問に思っていたのだ。

大虚の襲来のタイミング、普通ならありえない魂魄の離脱と月島の出現。

虚と人間で境界線を引いていたが、タイミングが合いすぎていてどうしても別問題とは考えられないのだ。

あくまで一つの仮説。それを浦原に話してみようと思っていたが、本人が出向いたのなら直接聞いた方が早い。

「あんたが大虚に襲わせんじゃねえのか!？」

「どうだと思う？」

一護は斬り掛かった。

「夏梨をどこにやった!!」

鋭い太刀音が鳴る。切り結んだ瞬間、一護の刀は爆発するように威力が倍增する。

だが月島は後ろへ跳躍した。

「さあね、僕は知らないな」

「てめえ……!!」

月島を追って地を蹴る。コンクリートを使役し跳躍を増幅させ、さらに空気を使役することで加速を助長する。

「なるほどね」

月島は笑う。

「君が完現術を使いこなし始めていることはよく分かった」

向かいの建物の手摺りに足を着け、完現術する。

一護と同じように跳躍を増幅させ、一護に斬り掛かる。その刃は的確に一護の左腕を狙っていた。

すぐに右腕で防ぐが、その時左腕を纏っていた完現術が解ける。

そのまま蹴られ、落下の緩和さえ出来ずコンクリートに身体を激突させた。

息が詰まる。

戦いの場数なら、ここにいる誰にも負けてはいない。死神だった頃だって何回も死線をくぐり抜けてきた。

でもやはり違うのだ。生身の身体と魂魄で戦うのは違う。死神の戦い方と完現術者の戦い方も違う。

痛む身体を無理矢理起こして、刀を振りかぶる月島へ応戦しようとする。試みる。

力が再び増長した。それは段々とかつての力に近付いている。

「『インウ』 エイダーズ・マスト・ダイ』」

突如、視界が黒く覆われた。平面な何かが一護を覆った後、そこに『SAVE』の文字が浮かぶ。

「そうか……完成に近付いた黒崎一護を接触させたくないんだ。だ

る？ 雪緒」

「悪いけどそのためじゃない。野次馬が集まってきてる。まあ派手に戦ってれば当たり前前だけどね」

確かに雪緒の言う通り、下から野次馬の声とサイレンが聞こえる。茶渡の放った一発で注目を集めてしまったようだ。

背中に何かが当てられる。

「……『ラブ・ガン』」

「さつさといなくなってくれる？ あたし、こついつの苦手なんだから」

リルカは子供の玩具のような、滑稽な形の銃を月島に突き付ける。

「じゃ、僕達は黒崎を連れて消えるから」

そう言って雪緒は背を向ける。月島もそれ以上何かする気配はない。

何か、おかしい。

茶渡は違和感を感じた。

これ以上ここに残っても月島が不利なることは分かる。だが、わざわざ自分から出向いたのに、こんなにあっさり退くものだろうか。

様子見に来たのか、いつでも襲えるという意味なのか、それとも

ふわりと背後に気配を感じた。さっきまでいた場所に月島がない。慌てて振り返る。

刀が胸を深く貫いた。

再び視界が開けた時、前の薄暗い部屋ではなかった。

何もない、質素な一室。

「はい、ロード完了」

雪緒の声に一護は辺りを見回す。

「月島は!？」

「退却した。一応、な」

一護は完現術を解きつつ、銀城の含みの言い方に眉を寄せる。

雪緒の完現術によって閉じ込められている間、何も見えず聞こえずで外の状況がまったく掴めなかった。

「何かあったのか？」

「……いや、きっと考え過ぎだ」

そう言う銀城の顔は晴れない。

「一護、力を使って早々に悪いが、次の修業に入るぞ」

焦りからか、余裕のない口調。思いの外、月島の襲撃が堪えたのだろう。

早く完成させなければ、月島が何を仕出かすか分からない。

いつ来ても対応できるようにしなければいけない。

「雪緒、準備しろ」

「はあ！？　なんでだよ！　コイツの充電切れそうだし、さっきので疲れたしいやだ！」

「プラグ差したままやればいいだろ。それに月島が霊圧を探ってきたんだとしたら、霊圧を完全に遮断できるおまえの完現術が必要だ」

さっきのように、未完成な一護と対峙させることだけは避けたい。

「できるな？」

「……」

雪緒は不貞腐れた顔で頷いた。

ポケットに仕舞ったゲーム機を出して操作する。

再び一護の視界が暗くなった。

「構えろ、一護」

目の前で大剣を携えた銀城を見てすぐ理解した。

「ああ……」

恐らくこれが、最後の修業。

二人は同時に地面を蹴った。

「そろそろですかね……」

店の前で闇に染まった空を見上げる。

今夜は雲の動きが早い。これは一雨くるな、と浦原は溜め息をつく。

突然、浦原が見つめる先に円形の障子戸が現れた。

「来たか」

隣で夜一が腕を組み、仁王立ちになる。

障子戸が開く。中から漆黒の蝶がひらひらと舞い、その後ろから多数の死神が出てきた。

「みなさんお疲れっス」

へらへらと笑うと、一人の少女が駆け寄り顔を殴った。

「このたわけが！ 何故夏梨のことを教えなかったのだ！」

「いやっスねえ、朽木サン。死神は全ての魂に平等でなくてはいけないんスよ？ 教えられるわけ……って、あら？」

浦原はルキアの隣に出てきた子供を見て瞠目した。それは夜一も同じ。

当然か。あれだけ捜しても見つからなかったのだから。

「夏梨サン生きてたんですか！？」

「うん。なんとか」

少し、やつれたようにも見える。だが黒曜石の目は変わらず爛々と輝いている。

あらー、と感心したような声を出す浦原に、夏梨は飄々と「あたしの身体は？」と尋ねた。

「うちに寝かせてあります。でも戻るのは井上サンに治してもらってからの方がいいですよ」

浦原は夏梨の失くなった右腕を見て言った。

「今は結界で何ともありませんが、夏梨サン怪我をしたでしょう？それが身体の方にも反映されてましてね」

恐らく、結界を解いた瞬間に本体の方の腕も同じように失くなるだろう。ならば織姫に『三天結盾』で腕を元に戻してもらったほうがリスクも少ない。

夏梨は渋々頷いた。こう何日も戻れないと流石に不安になってくる。

「では」

浦原が仕切り直しに、やけに明るい声で言った。

「
始めますよ
」

C o n t a c t : w h a t i s h i s a i m ? (後書き)

長かった……

かなり原作のほうを投爆しましたが、次々話あたりで原作抜けると
思います。

戦闘シーンが鬼畜すぎる……

展開が結構早めになってますが御了承ください……

感想お待ちしております。

d i s t o r t i o n

コツコツと扉が叩かれた。

窓の大きい病室。雨竜は本を読む手を止めて「どうぞ」と声を掛ける。

静かに開いたところに織姫が遠慮深げに立っていた。

「急に呼び出してごめん。来てくれてありがとう」

「うっん、全然。もう起きて平気なの？」

「ああ。このくらいなら」

少しの沈黙。

「……あのさ、怪我、あたしが治せば早く治るよ……？」

織姫が気まずそうに言つと雨竜も「そうだね」と頷いた。

「昨日、茶渡から聞いたんだ。黒崎が狙われているって。それに僕

を斬った奴が接触してる」

はっと息を呑む。

今日はまだ見ていないが、昨日ようやく完現術を発現できたくらいだ。昨日の今日で完成しているとは思えない。

一護は大丈夫だろうか。不安で胸が一杯になる。

「狙われたのが僕ならみんなから遠ざからなければと思っていたが、黒崎なら話は別だ」

雨竜は顔を上げて織姫をまっすぐ見詰めた。

「井上さん、この疵を治してほしい」

俺が今戦っている奴は、どこを見ている？

一護は思った。自分の相手をしている銀城の剣からは何も感じない。興味、快楽、殺意、寂寥。何でもいい。今までは切り結ぶたびに相手の心が感じ取れた。月島でさえ、ろくに見てもいないのに殺意だけが刺してくるようだった。

銀城はまっすぐ見ている。それなのに何も感じない。

「雑念が多いな」

銀城の声に呆れが含まれる。

「これは戦いだ。修業だって割り切ってんじゃねえよ」

一護はぐつと歯を噛み締めた。

分かっていることだ。それでも相手の心が見えないことに不安を覚える。

敵か、味方か。

「引きずり戻すしかねえか」

そう言った直後だった。ブツッと視界が途切れる。

柔らかい眼球を刃先が通る感覚。

「う……あああああ!!」

咄嗟に抑えた指先にぬめりと血の感触。思わず膝をつき手に顔を埋める。

「……何なんだ……」

浅く息を吐きながら、銀城がいる方向を必死に見ようとする。

勿論、何も見えず闇があるだけ。

「おまえはいつたい何なんだよ!!」

「うるせえよ」

首を蹴られ、後ろに飛ばされる。

こいつは本当に味方か？

そう自問しても領けない。

「おまえ……本当に俺の味方なのかよ……!!」

なんとか立ち上がった一護を再び殴り倒す。

視界を断たれ、平衡感覚を失くした身体は簡単によろめき倒れた。

「敵だと言ったら、おまえはどうするんだ？」

銀城の声が上から降ってくる。

「途中で俺達が豹変して襲い掛かってきたら、おまえはどうするんだよ。自力で切り抜けるか？」

笑わせんな。

低く、呟くように言った声は酷く冷たかった。

「死ぬ気でよけるよ、腰抜け」

問答無用、大剣を振り上げる。それを肌で感じた一護は、すかさず

右腕を前に出した。

鋭い太刀音。

嗚呼、と納得した。

こいつは敵だ。

先程とは打って変わり、身が竦むような殺気が溢れている。

一護は後退し、勢いよく跳躍した。そのまま右腕を振り下ろす。それを難無く銀城が弾き、身体を捻って大剣を薙ぐ。

紙一重で避けたのを確認すると、さらに追撃し下から振り上げた。

刃先が地面を削る音を聞き、咄嗟に身を退かせる。

「思ったより躲すじゃねえか」

余裕な表情の銀城に対し、一護の息はもう切れている。

「……目が使えなくても、気配や音で動きぐらい分かるんだよ……！」

かなりの集中力を要するが、確かに銀城の動きは把握できた。

それは経験からの勘だと思っていたが、その考えは間違っていた。
ぶつりと大剣が肩の肉を裂く。

「どうした、躲せるんじゃないかったのか？」

違う、加減していたのだ。一護がぎりぎり躲せるように。

銀城の猛攻が始まった。

容赦ない。先程までなぶるようなものだったのが一気に一護を追い詰める。

一護が倒れ込んだところへ、腹に突き刺し地面に縫い付けた。

「ぐあ……あああ……」

「終わりだな」

息が出来ない。声も出ない。

用済みとばかりに銀城の足音が遠退いていく。

「チャドと井上を殺す」

一護は何も見えない目を見開いた。

「予想はついてたろ？ 俺が味方じゃねえって解った時点だよ。心配しなくても、てめえも殺すさ」

二人の顔が浮かぶ。そして月島に斬られたであろう雨竜の姿も。

必死に剣を抜こうとするが手に力が入らない。

駄目だ。そんなことをさせては。

護らなければ。

その時、光が見えた。

「ああああああ!!」

ピリピリと何かが身体を覆う感覚。

「銀城!!」

しっかり見えていた。ぼんやりと銀城の姿を形作る光。

それは霊圧。

一護の右腕に光が集中する。風が鳴る音。

銀城がそれを地面に叩き付けた瞬間、巨大な爆発が起こった。

轟音と熱風。

「よくやった」

そこに殺気はなかった。

「完成だ」

え、と顔を上げる。

完現術は完成する瞬間、今までその道具に溜め込まれた魂が一気に解放されるので、必ず誰かが身を挺して抑え込まなければいけない。

巨大な力は術者を殺すことだっただけである。

一護の力量を考慮すると、その役をやるのは必然的に銀城だった。

「だから、どうしても俺の目の前で完成させてもらわなきゃならなかった」

今、銀城の右腕は一護の力を抑え込んだためボロボロだ。

「悪いな、ベタな悪役しか出来なくてよ」

あたしは目を擦りながら、学校から出た宿題に必死に取り組んでいた。

数学は嫌いじゃないけど、一問解くのに三十分も掛かる問題をたくさんやりたいとは思わない。

ふあ、と欠伸をする。

時計を見るとちょうど夜中の一時になったところ。

そろそろ風呂に入るか、とシャープンを置いた時、携帯が鳴った。知らない番号。取り合えず出ると、すごく懐かしい人からだった。

幼い頃、よく一緒に遊んでくれた人。空手であたしが一護に勝つといつも褒めてくれた。一護もその人を見るとすぐに泣き止んで、嬉しそうに笑ってたっけ。

最近、一護が夜遅くまで帰ってこない、遊子ちゃんが心配しているとその人が電話越しに言った。

啓吾や水色も呼んだから、あたしも来ないかと誘われた。もちろん二つ返事で返し、すぐに家を出る。

まったく、可愛い妹をほって置くなんて。少し説教してやろう。

久しぶりに家に帰る気がした。

雪緒の完現術でゲーム機の中にいたのだが、何日もいた気がして実際は九十分しかいなかった。

それは雪緒の心遣いで『早送り』をしてくれていたらしい。

それと、茶渡が織姫を連れて来たようで、織姫は一護の痛ましい姿を見た瞬間、泣きそうに顔を歪めていた。

銀城から受けた疵も治り、目も元のように見える。

雪緒が完現術を解く前に、一度完現術が本当に完成しているか確認してみたのだが、その姿に茶渡、織姫、それに一護自身も驚いた。

なんとなく、破面が帰刃した姿と重なった。
レスレクシオン

代行証も小刀に変わっていた。

内なる虚が関係しているのだろうか、と一護は夜道を歩きながら考える。

「ただいま……」

遊子は起きているだろうか。きっと心配している。

そう思っていたが、パタパタと奥から走ってきた遊子の顔は明るかった。

「おかえり！ お兄ちゃん、やっと帰ってきた！」

「お、遅くなつて悪い……」

良かった、と安心する反面、父の姿が見えないのが気になる。

ずっと一人だったのかと思うと、兄として失格だなと苦笑した。

「あのね、今日は懐かしいお客さんが来てるの！ 誰だと思う？」

こんな夜中に来る知り合いなんていただろうか。

(……いや、いるな)

頭の中に浦原やルキアなど、かつての死神の仲間達が浮かぶ。

だが彼等を遊子は知らない。

「ヒント、いとこの誰かです！」

「いとこ？」

確かにそれは懐かしいと居間に顔を覗かせた瞬間、息が止まったような気がした。

月島。

「ね！ びっくりしたでしょ！ お兄ちゃん、シュウちゃんだよ！」

遊子の声も耳に入らない。

何故、こいつが此処にいるんだ。

何故、遊子はこのつを知っている。

“いところ”って何だ。

「やあ、
“一護”。久しぶりだね」

d i s t o r t i o n (後書き)

今回は少し短いです。

とにかく修業のシーンが終わって良かった(´・`・;)

かなり展開が速い気がしますがお愛敬で(^ P ^)

The reason of killing(前書き)

あたしの両親は、すごく暴力を振るう人達だったらしい。

赤ちゃんだったあたし。

あたしが殺されると思って、あの人があたしを連れて逃げてくれた。

だから、

あたしはいつでも貴方の疵を治してみせるよ。

月島さん。

The reason of killing

時よ、どうか止まってください。

このおかしな空間を壊してください。

こんな茶番、終わらせてください。

「久しぶりだね、一護」

「久しぶりに夕飯いっしょに食べたんだよ！ 夕方に急に来たからびっくりしちゃった！」

「ごめん。迷惑だったかな」

「ううん！ シュウちゃんと食べるご飯楽しかった！」

こいつは、敵で。俺を狙っていて。

夏梨を大虚に襲わせた

考えるよりも早かった。まるで家族の一員のように寛いでいる月島の胸倉を掴み上げる。

「てめえ……ここで何してんだ……!!」

「お兄ちゃん!？」

胸が苦しい。ありえない、信じたくない。

「待つて、お兄ちゃん! 何してるの!？」

遊子が腕を引つ張る。まるで俺がおかしくなったみたいだな、こいつが大切な人みたいな言い方。

「シュウちゃんが急に来たことに怒ってるの!？」

やめてくれ。その名前を呼ばないでくれ……

「遊子に……何しやがった……!!」

「いいんだよ、遊子。一護は真面目だから、きつとこんな時間まで

家にいた僕に怒ってるんだ」

「答える!!」

気安く遊子の名前を呼ぶなよ。おまえは敵だろ。知ったような口を利くなよ。

何の冗談だ？ 何でこんな……

その時、インターホンが鳴った。

「あ、遊子、出てあげて。

たぶん、啓吾達だ」

「　　っ!？」

玄関から声が聞こえる。たつき、啓吾、水色の。

「秀さん来たよー」

啓吾……

「あれ、なんだ一護もいるじゃん」

「ほんとだ」

「こら、一護！ あんた最近、夜遊びしてるらしいじゃない！」

居間に入ってきた三人。学校で別れた時と何も変わっていない。

でも、

「今晚は、秀さん！」

「秀さん、久しぶりい！」

違う、なんで、何が起きているんだ……？

遊子だけじゃない、この三人は月島を知らないはずだ。ましてや俺の従兄弟なんかじゃない。

「久しぶりだし、みんなに会いたくてね。そう怖い顔するなよ。明日は日曜日だしいいだろ」

それは昔からの知り合いのような口ぶり。

「……そうだ」

おかしいのは、

「チャドと織姫も呼ぼうか」

俺か？

ガシャンッ

気付いたら殴っていた。

窓にぶつかり、派手に割れる音。

「月島……てめえ皆に何しやがった……！！ 言えよ……！！！」

呼吸が、息がうまく吸えない。

何より恐ろしい。今の俺の立場は、いったいどうなってるんだ。

「月島あー!!」

言えよ……

みんなに何したんだ……

「大丈夫!? 月島さん!」

たつきと啓吾が駆け寄る。

「一護!! あんた何してんだよ!!」

たつきが、こんなふうにも怒鳴るのは何度か見たことはあった。でも今たつきが護ってるのは月島で、敵意は俺に向いていて。

「あんたが何にいらついてんのか知らないけどさ! 久しぶりに会った親戚に何だよこれは! あんた月島さんのことあんなに大好きだったじゃない!!」

「たつき、違う……俺は……」

「何が違っんだよ……！　いいから謝れ……！」

「一護」

「お兄ちゃん」

「どうしたの、本当に」

「おかしいぞ、おまえ」

「一護」

堪えきれなかった。

割れたリビングの窓から外に飛び出した。

靴なんて履いてないが関係ない。

啓吾の声が後ろから聞こえたが、それすら恐ろしかった。

みんな、違う。俺はおかしくない。

これが……月島有能力なのか……？

目の前に白塗りのワゴンが止まる。

「一護じゃねえか。何があつた？」

育美さんに店まで連れていかれた。頭を整理するのに調度良かった。

「落ち着くまでいな。何があつたかは話したきや話せ」

こういう時、本当に助かる。

いつもは目茶苦茶だけど、やっぱり大人だ。

突然インターホンが鳴り、育美さんが出ていく。

誰かに言えないのがつらい。嘘だと信じたい。

誰でもいい、

「一護、良かったな！」

誰か、

「月島さんが迎えに来てくれたぞ！」

嘘だと言ってくれ

たった数日だったが、浦原商店から家までの道のりは酷く懐かしかった。

いマルキアと浦原は一護に死神の力を取り戻させる準備をしている。暇になった夏梨は、出来たら一度家に戻りたいと申し出たのだ。

魂魄のままなので遊子には姿を見せることは叶わないが、遊子の元気な姿を確認したい。

夏梨は小さく欠伸をした。

もう夜中をとうに過ぎだ時間だ。きっと遊子は寝ているな、と苦笑しながら家に入る。

鍵は掛かっていなかった。電気もついていない。

変だ。

そこには違和感があった。

何とはなしにリビングへ向かう。

「窓が割れてる……」

破片は片付けられたのか見当たらなかったが、大きく割れたところから風が入り込んでいた。

ふと、テーブルの上にメモが置いてあるのに気付く。

『お兄ちゃんへ』

シュウちゃんの別荘にみんなというから、ちゃんと来てね！

絶対だよ？

遊子より』

「誰だよ、シュウちゃんて」

自分がない間に友達でも出来たのだろうか。にしても別荘だなんて金持ちだな。

そんな事を考えつつ家を出る。空を見上げるが、月は雲に隠れていて暗い。

「一兄は……こっちか」

わずかに感じる一護の霊圧。そこに複数の、知らない者も混じっている。

夏梨は歩き出した。

月島から逃げるように店から飛び出した一護は途中、銀城と合流した。

銀城から聞いた話は希望を削ぐのに十分だった。

リルカも、沓澤も、雪緒も、ジャッキーも、全員月島に“やられて”いた。

正気なのは彼等二人のみ。他の者からしたら正気ではない二人。

月島能力は『記憶の操作』。自身の存在を斬った相手の過去に挟み込む。

だから彼等にとって月島はずっと“そこにいた”親友で、恋人で、家族なのだ。

そして、その“深い繋がり”は月島を殺したところで断ち切れるとも限らない。

最悪、護りたかった相手に人殺しとして怨まれ憎まれ、“異常”と思われ続ける。

それでも、殺すしかないのだ。

「あーあ、物騒な相談してるなあ」

突然の声に振り返る。

「やっぱり、どうかしちゃったんだね、空吾」

足音と共に雪緒が現れる。目には憐れみの色。

「さあ帰ろう。大丈夫、すぐにまともに戻してあげるよ」

鬱蒼とした森を抜けると目の前に古びた洋館。

扉から月島が出てきた瞬間、一護は代行証を握り駆け出す。

「待て！」

銀城の手が一護の腕を掴んだ。

「考え無しに突っ込むな。奴の能力が俺の予想通りなら、一回斬られたら終わりなんだぞ……！」

その言葉にぐっと堪える。

冷静さを失ってはいけない。それが命取りになるかもしれない。

「よしなよ。僕は君達と戦いたいわけじゃない。中で話そう」

「……わざわざ罨が張ってあるかもしれないねえ屋敷の中なんかに入るかよ……」

「冗談だろ？ 罨を張るなら、ここへ来る途中の森の中に仕掛けるさ」

それが真意なのかさえ分からない。もしかしたら罨が張ってあるかもしれない。

だが、一步踏み出さないことには始まらない。

恐る恐る入ると、照明が付き小さな破裂音が鳴った。

鼻を擽る火薬の臭い。

「おかえりー！！」

そこにはクッラッカーを持ったみんながいた。

遊子、竜貴、啓吾、水色、育美……

みんな、月島と“深い繋がり”を持つ者。

「良かったね、お兄ちゃん！ シュウちゃん全然怒ってないって！」

「良かったな一護！ ちゃんと今のうちに謝っとけよ！」

「そうだ」

「謝っときな」

「謝りなよ」

「謝れ」

彼等の言葉は一護の心に突き刺さる。

護りたい者達なのに、まるで敵陣に踏み込んだようだ。

いや、これが月島の狙いなのだろうが。

みんなの声を振り切り、階段を駆け上がる。

今すぐ月島を斬ってやりたい。だがあのまま戦えば、みんなを巻き添えにしてしまう。

階段を上りきった一番手前の部屋に入ると、まるで待っていたとばかりにリルカやジャッキー、沓澤がいた。

「良かった。どうやらお元気そうだ」

彼等も、月島の仲間で

「ああ。僕も安心したよ」

背後からの声にすかさず身を翻し後退する。背中を見せてはいけない。斬られてはいけない。

遅れてきた銀城が、竜貴達が上がってこないように階段を破壊した。

「全力で戦え、一護!!」

代行証を掴み、完現術を発動させる。

月島は向かってくる一護に対し栞を刀に変形させるが、認識するよ

りも早く左腕を切断させられた。

血が溢れ、いつも表情を崩さない顔を歪める。

「それが君の完現術か……！ この短期間でよく成長した……！」

「……せいぜい今のうちに余裕ぶってろ」

刀を構えなおす。

「俺はてめえを殺しにきたんだ」

視界の端、窓に何かが映った。直後、破壊音に砂煙が舞う。

月島を庇うように立つ二人。

「チャド……井上……」

予想はしていた。つらい現実。

「『双天帰盾』」

織姫の立花が月島の腕を治す。彼女の瞳には憐れみ。

「さすがだね。いつも通りすごい治療だ」

治った腕を動かしながら言うと、織姫は嬉しそうに笑った。まるで親愛する兄に向けるような笑み。

茶渡が二人の前に出る。

「チャド……」

やっぱりお前らも同じなのか。

そう尋ねれば茶渡は困惑する。

「『同じ』の意味が分からない。一護、おまえはどうしてこんな事をしているんだ……！」

「黒崎君……今までずっと月島さんに助けてもらってきたこと忘れちゃったの……？」

織姫の憐れむような目は変わらない。

「朽木を助けられたのも、藍染を倒すことが出来たのも、全部月島さんがいたからじゃないか！」

嗚呼、

「理解、出来てるかい？」

彼等の過去と、自分の過去は違う。月島によって変えられてしまった。

今、彼等の過去は月島と共に歩んでいる。洗脳ではない。“事実”なのだ。

「君だけが、誤った過去を歩んでいる」

それは死刑宣告にも似ていた。

「君だけ違って寂しいだろう？ だけど安心していい」

本当に狂えたら、どんなに楽なのだろうか。

「すぐに、その想いは最初から無かったことになるから」

殺す。

「うあああああああ……！」

振り下ろした刀は織姫によって阻まれる。

右手からの茶渡の攻撃。それをぎりぎりで押さえ込む。

「……どうしてだ、一護……俺はおまえを殴るために強くなったんじゃない……！！」

茶渡の左腕が光る。

それは破壊するための腕。一護を敵と見なした証拠だった。

「『悪魔の左腕』」

ドン、と巨大な力が爆発し壁を破壊する。

なんで、なんでこんな事になったんだ……

力を取り戻したかったのは、彼等を護りたかったから。

「俺はいつたい何のために力を取り戻したんだ!!」

それなのに、仲間と戦わなくてはならない。

「月島あ!!」

上段から振り下ろした刀を難無く受け止められる。だがその隙に横から脇腹を蹴り飛ばした。

一線を描いて屋根に落ちる。

一護は刀を構えた。

「『月牙天衝』!!!!」

横に薙いだと同時に斬撃が放たれた。

完現術と死神の力の融合。

月島は危つく弾き、背後の森へ斬撃が飛ぶ。

轟音、ビリビリと空気が震えた。

「……参ったな……」

さっきの攻撃で焼け焦げた自分の右腕と、絶望と憎しみを瞳に宿した一護を見て笑う。

「これ、もう仕上げていいんじゃない？」

奇しく呟かれた言葉は、一護に届くことなく闇に消えた。

The reason of killing(後書き)

次回からオリジナル入れるだろうか……

はやく死神の皆様と夏梨ちゃんを出したい！(^O^ ^O^)

それとあの人も……

最近、原作ばかりですみません(´、；)

感想お待ちしております。

H
e
m
e
e
t
h
e
r
a
g
a
i
n
・
(前書き)

眩しい笑顔の貴女は誰だろう。

H e e t h e r a g a i n .

左手からジャッキーの蹴り、前から沓澤、上へ避ければリルカの『ラブ・ガン』。

一護の方にも加勢に行きたいが、こいつらがうざったくて仕方ない。それにしても一番厄介なのはこの餓鬼だ。月島が連れていた獅子河原とかいう坊主。

いつの間にこんな奴を見つけたのか。

馬鹿面してパンチ一つたいした威力はない。だが奴の完現術にかかれば、そんなふざけたパンチでも骨を折ることが出来る。

『ジャックポット・ナックル』。

確率を操作して大当りの出目を引き出す能力。

「余所見なんて余裕じゃないかい」

目の前に蹴りが迫る。

俺は窓を割って外に飛び出した。空気を使役して足場を作る。

流石に四対一は分が悪い。せめて坊主だけでもいなくなれば楽になるんだが。

一護の方を見る。

井上とチャドが月島の盾になって上手く手が出せないようだった。

酷なことをしやがる。

「月島あ……！ 出てきて、てめえが戦えよ……！」

やばい。

直感でそう感じたのと同時だった。

月島が一護の背後へ回る。

一護は斬らせちゃなんねえ。

俺は空を蹴り、一護と月島の間合いに入る。

刀が肩からめり込んだ。

「銀城!!」

落ちていく。一護を庇った彼は月島に斬られた。

どうなるのだろうか。銀城も彼等と同じように、月島を『味方』だ
と思ってしまうのか。

そうした時、どうすればいい？

「大丈夫か銀城!!」

お願いだ、あんたまでいなくならないでくれ。

「銀城!!」

「……………」

呻きが聞こえた。頼むから、と切に願う。

「……うるせえな……俺にばっか気を取られてんじゃねえよ……黒崎……」

つらそうに顔を歪めてはいたが、彼は『彼』のままだった。

そのことに一護の瞳は少しだけ、光を取り戻す。

後ろから迫っていた月島をすかさず薙ぎ払った。

「銀城、大丈夫なのか!？」

「……分かん」

なんとか上半身を起こし答える。

「ただ、今はまだあいつを敵だと認識しているし、おまえのことを仲間だと思ってる」

「そうか……良かった……!」

彼が『彼』でなくなったら、それこそ独りだ。そしたらもう自分一人では月島には勝てないし、彼等を元に戻すことも出来ない。

だが、タイムリミットも近付いている。

銀城に能力が発動する前に月島を倒さなければいけない。

それが出来なかったら、そこで終わりだ。

タン、と何者かが背後に降り立った。

振り返り見れば、そこには病院で入院しているはずの雨竜。

どっちだ……！？

一護の中に疑念が渦巻く。

彼も月島に斬られたであろう一人。疵が治っているということは織姫が治したということ。

仲間か、否か。

「石田……！」

雨竜は銀嶺弧雀を静かに構えた。

「やっぱり……おまえもなのかよ……」

かつての仲間は、みんな月島の仲間になってしまった。

「黒崎、こっちへ来い。下の階の様子を見た。安心しろ、僕は味方だ」

なら何故、武器を向けるのだ。もはや銀城以外、信用できない。

「どうした。早くしろ、黒崎……」

罨だ。

「黒崎……！！」

雨竜の音が響いた。

「解らないのか！！ 僕を斬ったのはおまえの後ろにいる奴だ！！」

振り返るより早く、銀嶺弧雀が放たれる。

それを弾いた剣で銀城は一護を斬った。

「黒崎！！」

叫んだ彼の背後に月島が迫り斬り付ける。

銀城は腹の底から笑った。まるで、計画通りだとしても言っように。

「銀、城……なんで……」

絶望。彼だけは信じていたのに。

膝から崩れ落ちた一護は戦意を全て削がれていた。

やっぱり、月島的能力で……

「勘違いするな。俺は月島に斬られておまえの敵になったわけじゃない」

月島に二度斬らせて、元に戻ったんだ。

「貰っぜ、おまえの完現術」

胸に大剣が突き刺さった。

ぽつり、ぽつりと空から雫が落ちる。

雨竜を斬ったのは月島ではなかった。

銀城が斬り付け、そして自分を月島に斬ってもらい、“敵”として過去を挟み込んだ。

絶対に悟られないために。

一護の身体を纏っていた力が吸収されていく。

何の力もなくなった代行証が手から滑り落ちた。

雨が降る。

護りたい者を護れなかった。それどころか、ようやく取り戻した力が消える。

みんなは、ずっとこのままなのだろうか。

夏梨は……？

「あ……あああああ……」

雨が体温を奪う。

ようやく得た一筋の光は、彼を容赦なく絶望へ突き落とした。

喪失感。

叫んで、叫んで。それでもこの胸の穴は治まらない。

「……泣いているのかい。可哀相に」

同情の欠片もない。

始めから仕組まれていた茶番劇。敵である男を信頼し、力を得たと密かに喜んだ姿はさぞかし滑稽だったであろう。

「好きに泣かせといてやれ、そいつにもう用はねえ」

そして恐らく、もう会うこともない。

銀城は背中を向けた。

「……返せ……返せよ……」

「何言つてんだ？ おまえ。元々、俺のお陰で取り戻した力だろうが。俺が貰って何が悪い」

答えるのさえ面倒臭そうに言い放つ。彼にとって興味があるのは一護の力であって、それがなくなった一護はもはや対象外なのだ。

無用。殺す価値さえない。

「用済みのくせに命も取らねえんだ。礼の一つも言ってくれよ」

この男はどこまで非情なのか。

遠ざかる背中。このまま行かせてはいけない。きっと二度と会わない。

「銀城！！」

立ち上がった一護の胸を、背後から刀が貫いた。

月島か……？

そう思い、ゆつくりと振り向いて見たのは、最近見なかった父と、戦い方を指南し死神として育ててくれた浦原の姿だった。

「……親父……浦原さん……」

手が刀に触れる。嘘だと思いたくて、でもそれは確かな存在を示している。

これ以上、何に絶望すればいいのだろうか。

「……そうかよ……」

刀の刃を握りしめる。

「親父達まで……そうなのかよ……」

琥珀の瞳から、雨とも涙とも分らない雫がこぼれ落ちた。

「……馬鹿野郎、俺じゃねえよ」

一心は呟くように言った。

一護の目に、二人ではない何者かの姿が形作られていく。

「もう見えてるはずだ。その刀を握ってんのが誰なのか」

光って見える霊圧は酷く懐かしい者のだった。

記憶に残る姿より髪は短い。前は何もしていなかった腕に副隊長を示す腕章。

「……ルキア」

刀が光り、風を巻き起こした。

そこから自身に流れ込んでくる力。懐かしい魂の一部。

漆黒の袴に身を纏い、鋭利な刀を持つ巨大な刀を携えた姿。

彼の横に立ち並ぶようにして現れた死神達。

「はっ！」

銀城は吐き捨てるように笑った。

「良かったじゃねえか、黒崎。死神の力が戻ってよお」

スッと細められた目は獣のようにぎらついていた。

「みんなを元に戻せよ、月島……」

「僕が素直にそうすると思っかい？」

挑発的な態度に一護は眉を寄せる。

やはり、殺すしかないのか。

ぐっと柄を握る力を込める。

動き出そうとして、一護は固まった。

「……お兄ちゃん！」

下にいるはずの遊子が立っていた。

「ほんとに一護の奴、どうしちゃったんだろ……」

啓吾がぽつりとぼやいた。

“月島とあんなに仲が良かったのに”

「お兄ちゃん……」

遊子は服を握りしめた。“大好き”な月島と兄が喧嘩なんてしてほしくなかった。

それにしても、何故あんなにも憎々しげに月島の名前を呼んだのだろうか。

“昔”はいつも月島にくつついて、それこそ世界の中心が彼だと思えるほど一緒にいたのに。

ぽつ、と水滴が窓を叩く。

「雨……」

ふらりと窓に近付き、思い切り開けた。

「ちよつ、遊子ちゃん!？」

冷たい雨が容赦なく降り注ぐ。

竜貴はぎよつとして駆け寄るとすぐに閉めた。

「何やってんの、濡れちゃうよ!？」

水滴が髪を伝い、床に水溜まりを作る。

竜貴が急いでタオルで拭くのに関わらず、遊子は呆然と外を眺めていた。

「……泣いてる……」

小さく呟いた。

はっとして見ると、遊子の目からぽたぽたと涙が落ちる。

「お兄ちゃん、泣いてる……」

遊子はくしゃくしゃに顔を歪め、竜貴の手を振り払い外に飛び出し

た。

雨は嫌い、大嫌い。

だって大切な人を奪ったから。

……誰を？

誰を、奪ったんだっけ……？

雨は身体の体温を奪う。

遊子は建物の裏へ回り、そこにあつた非常用の螺旋階段を駆け上がつた。

「…………お兄ちゃん！」

雨の中、見慣れない者達と立つ兄の姿を見付けた。

巨大な刀、黒い着物。

何も知らなかった遊子は一瞬だけ目を見開いたが、すぐに月島へ顔を向けた。

「どうしたんだい、遊子。ここは危ないよ、下でみんなと待ってて
って言っただろ？」

「……シュウちゃん……お兄ちゃんの力、返してよ……」

ボロボロと涙をこぼす。

霊圧が異常に飛躍する。

「黒崎、おまえの妹……」

日番谷の言葉に、こくりと唾を飲み下した。

感情が高ぶっているせいか、安定しない霊圧。上がったり下がったり、非常に不安定で、これでは虚を呼んでしまう。

「遊子、落ち着け……！」

「だ、ってえ……お兄ちゃんを、泣かしたからあ……っ」

嗚咽を漏らし、震える声でなんとか言葉を紡ぎ出す。

頭を抑え、その場にしゃがみ込んだ遊子に今すぐ駆け寄りたいが、迂闊に月島達から目をそらせられない。

「シュウ、ちゃん……あたし達に何したの……っ」

「遊子……？」

「僕は何もしていないよ」

霊圧がさらに高まった。

「じゃあ、なんで……っ、お母さんは“いる”のに、記憶にはいないの……？　なんでシュウちゃんが代わりにいるのお……っ！？」

どういうことだ、と一護の頭の中は真っ白になる。

遊子は両手に顔を埋めた。

頭の中で、たびたびノイズのように走る景色。

夢の中の。

『遊子』

そう呼ぶ母は、記憶にいない。

あたしは急いで遊子の後を追った。上に続く階段は屋上に出る。すぐにはしゃがみ込んだ遊子ちゃんを見付けた。

死神になった一護も。

それだけじゃない。去年短い間だけ同じクラスだった朽木さんも、その他の死神達もいる。

一護は月島さんに刀を向けていた。

「一護!!」

雨にも負けない声で叫ぶと、なんでと言うように目を見開く。

「一護、なんでだよ!!　なんで月島さんに刀を向けてんだよ!!」

なんで。

「小さい頃はずっと一緒にいたじゃんか!!」

うざったいほどに、月島さんに引っ付いていた一護。

まだ、あたしが『たつきちゃん』て呼ばれていた頃。

空手であたしに負けて、すぐに泣いて。それでも月島さんが来ると嘘みたいに笑って。

「たつき……」

一護の顔が歪む。

『たつき』

あれ……？

「たつきちゃん、違うよ……」

遊子ちゃんが嗚咽を漏らして泣く。

何かが違う。

でも、何が違う？

『たつきちゃん、一護をよろしくね』

初めて一護に会った時、そう言ったのは、誰だった？

記憶を手繰り寄せる。一護のそばにいるのは月島さん。

それじゃあ、この嘘みたいに綺麗な女の人は誰だっけ……？

「一護……」

いつからあなたは、『たつき』って呼ぶようになったんだっけ……？

「真咲って、誰……？」

『初めまして、たつきちゃん。真咲おばさんと呼んでね』

「ねえ……あたし何か忘れてる……？」

胸が苦しくなる。

「　　っ、月島……てめえ……!!」

一護が激昂する。遊子ちゃんが泣いている。

「たつき、遊子、君達は何も忘れていないよ」

「月島あ!!」

あたしは何を忘れた？

頭が痛い。

七年前に、あんたが失くしたモノって何？

「……を、消さないで……」

空気が重くなった気がする。息がしづらい。

力が足から抜けて、地面に膝を着いた。

「お母さんを、消さないでよ……!!」

視界がぐらぐらと揺れて、耐え切れず倒れそうになった身体をなんとか支える。

“ お母さん ” ……

『 母ちゃん！ 』

嗚呼、そう言つて笑つたのはあんで、

泣き虫なあんたの頭を撫でたのは、あんたのお母さんだったね。

嘘みたいに綺麗な真咲さん。七年前、雨の日に亡くなった

「 みんな、此処にいたのね 」

そんな声が聞こえた気がする。でもきつと空耳だ。だってありえないもの。

あたしの意識は闇に沈んでいった。

He meet her again. (後書き)

月島さんの能力、勝手に『自分の存在を誰かと差し替える』ことも出来るようにしてしまったけど、大丈夫だろうか……

題の『He meet her again.』

一応、二人に掛けてます。

一人はもちろんルキア。

もう一人はあの方です。

きっと皆さんお気づきですよね(^^;)

ここまで閲覧ありがとうございました。

まだまだ続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7741x/>

El loto florece eternamente.

2011年11月23日14時48分発行